

2020京都大学のFD

— 京都大学の教育を、語り合う —



2020 Mutual Faculty Development



2020京都大学のFD

ー京都大学の教育を、語り合うー

2020 Mutual Faculty Development

01	I. ごあいさつ
02	II. 全学レベルのFD 1. 平島 崇男 教育担当理事インタビュー 2. 全学教育シンポジウム 3. オンライン/ハイブリッド型授業を支援するための学内講習会 4. PandA・Zoom講習会 5. 教員調査 6. 京都大学のFDウェブサイト
18	III. 各部局のFD 1. 大嶋 正裕 副理事・工学研究科長インタビュー 2. 岡邊 健 教育学研究科准教授インタビュー 3. 喜多 千草 文学研究科教授インタビュー
21	IV. 新任教員教育セミナー
23	V. プレFDの取り組み 1. 大学院生のための教育実践講座 2. 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」 3. 文学研究科プレFDプロジェクト 4. 大学コンソーシアム京都との連携による単位互換リレー講義 5. TAと協働してオンライン授業を行う
29	VI. ICTの教育的利用 1. オープンコースウェア (OCW) 2. KyotoUx: 大規模オープンオンライン講義 (MOOC) 3. KoALA: 学内向けオンライン講義 (SPOC) 4. ICT活用教育のためのポータルサイト (CONNECT) 5. Teaching Online@京大の開発と公開 6. ワークショップ“Expand your borders, experience Virtual Exchange!”について
45	教育制度委員会FD専門委員会 (概要)

I. ごあいさつ

教育制度委員会FD専門委員会 前委員長
高等教育研究開発推進センター センター長
飯 吉 透



本学における全学的FD体制として、2006年に研究科長部会の特別委員会として設置されたFD研究検討委員会は、2019年に教育制度委員会のFD専門委員会として生まれ変わり、引き続き高等教育研究開発推進センターの協力を得て本学のFDの企画・実施を推進しています。本報告書は、本学のFD活動の概要を学内の皆さまに具体的にご紹介するために、FD専門委員会が高等教育研究開発推進センターの協力のもとに毎年作成しているものです。

2020年度は、世界中が新型コロナウイルス感染症の多大な影響を被り、ご存じのように国内外の幾多の大学が、対面授業からオンライン授業・ハイブリッド授業への移行を余儀なくされました。このような中、本学でも、全学・各部局レベルで様々なFD的支援がおこなわれましたが、本報告書では、これらの取り組みについての詳細・具体的な内容が網羅されています。さらに、これと並走して、オンライン・ハイブリッド授業等に関する教員調査が二回にわたって実施されましたが、その前期分の概要と結果の要約も報告されています(後期分については、近日中に、「京都大学のFD」「Teaching Online@京大」等のサイトにて学内限定で報告される予定です)。ICT・インターネットを活用した新たな授業方法に、本学の各学部・研究科の先生がたがどのように取り組まれ、どう感じられたのか。また、教育的な効果や課題・障壁は何であったのか等々、多くの知見や示唆が得られる内容となっていますので、是非一読いただければ幸いです。

このような世界の高等教育界を揺るがすような未曾有の状況や変化に鑑み、「京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する」というテーマで開催された本年度の全学教育シンポジウムは、本報告書の中でも紹介されているように、これまで京都大学が大事にしてきた教育理念・手法・環境や学びの文化・伝統を踏まえた「ベストミックス」な教育や「大学と社会のこれから」のあり方、さらに今後の本学の教育を巡る方向性や課題について、共通理解を深めつつ可能性を模索する有意義な場となりました。また、本シンポジウムはオンラインのみによる開催でしたが、例年よりも多くの教職員の方々が参加され、オンライン上のアンケート・意見交換ツールなども活用を通じて、様々な観点から活発な議論や意見交換が登壇者と参加者を交えておこなわれました。

本報告書の冒頭にあるインタビューの中では、2020年10月より新たに教育担当理事・副学長になられた平島崇男先生が、「アカデミック・

フリーダムの尊重」や「学生同士が知り合う場や話せる場」の重要性についてお話しになっています。年間を通じて、授業のオンライン化・ハイブリット化に意識が向けられがちだった中、本学の「教育研究の切磋琢磨の場としてのリアルなキャンパス」における対面活動の大切さについて、あらためて気付かされることも多かったと思います。さらに、「ポストコロナにおいては、授業形態・学習方法のバリエーションが増え、フレンドリーな教育が進んでいく」と平島理事は述べられていますが、このように教育・学修の形態・方法の多様化が世界の高等教育において進むことが予想される中、教育の質を維持し向上させることが、ますます喫緊の課題となっているのも確かです。

現在、中央教育審議会答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」(2018)を踏まえ、同審議会大学分科会の質保証システム部会では、日本の大学における教育の質保証を今後どのようにおこなっていくべきか、という議論が進んでいます。変化の激しい世界の高等教育の状況を視野に入れながら、日本の高等教育システム全体、個々の大学、研究科・学部・学科プログラム、コース、授業など、マクロからミクロの各レベルにわたる教育の質保証の重層的・多面的な仕組みを考え動かしていくのは容易なことではありません。

「学生の主体的な学び」という観点も重視しつつ、各大学が自発的・自律的に教育の質を担保していくためには、教育制度の整備だけでなく、FDを通じた教員・部局間での経験・実践知、教育上の課題・解決策の共有や対話の場を増やし広げていくことが肝要です。新型コロナ禍下で、学内のFD関連の講習会・相談会・イベントの多くもオンラインで開催されており、このような新しい形態でFDも実施できるということに加え、その効果や利便性についても体験的に理解が進む機会も少なからずあったかと思います。今後は、「FDで何を扱うか」の検討や吟味に加え、「どのようにFDをおこなうか」に関する創意工夫も大いに期待されるところで

す。

最後に、FD専門委員会委員長については、本年度後期から副学長・文学研究科長の宇佐美文理先生にお引き継ぎいただいておりますが、今後の全学的FD体制が、本学におけるFDの益々の充実・進化の基盤となることを祈念させていただくと共に、各部局の教職員の皆さまには、FDを通じた本学の教育のさらなる進展に向けて、より一層のご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

II. 全学レベルのFD

I. 平島 崇男 教育担当理事インタビュー

2020年10月1日から、教育・情報・図書館担当の理事・副学長に就任されました平島崇男先生に、教育担当理事としての抱負や今後の教育の在り方について伺いました。

レイト・スペシャリゼーションと学生へのサポート

——前職である理学部・理学研究科長として、教育において尽力されてきたことはどんなことですか？

理事就任に際して、理学部の「教科の手引き」を最初の引越荷物の一つとして持ってきました。その冒頭には、理学部・理学研究科の教育理念が書いてあり、この理念をどうやって実質化するかということに力を入れてきました。特に理学部・理学研究科は、本学の学風でもある「自由」を大事にしており、学生は自らの知的関心に即して自由に勉強することを尊重しています。しかし、能力と意欲のある学生はいいのですが、目的意識が薄いまま入ってきた学生や授業でつまづいた学生にはサポートが必要です。

私もそうでしたが、理学部の学生の多くは、漫画『数字であそぼ。』でも描かれているように1回生の数学でつまづきを経験します。周りの同級生や教員と交流していたら、こうしたつまづきを乗り越える方策が見つかるだろうと思いますので、理学部では少人数担任制を敷いて、進級できない・成績が急に落ちたというようなケースには三者面談も行なって学生をフォローしています。2年生の終わりに5つの系のどれに入るのかの系登録を行うのですが、系登録ガイダンスを繰り返し行い、学生に事前に理解してもらえるよう努めています。

理学部には理学科1学科しかなく、必修も卒論（「課題研究」）のみです。最初から専門を絞るのではなく、「レイト・スペシャリゼーション」といって、多様な学問分野を広く学ぶことで、学問の多様性に早くから気づき、その中から自分の専門性を見つけてい

くよう促すという方針をとっています。また、「自主ゼミ」も積極的に推奨してきました。これは学生が自ら研究したいテーマを立てて、自分たちで進めるゼミです。部局としても、自主ゼミのために講義室を貸したり、教員も輪読などに参加したりしてきました。私も学部生の時に自主ゼミを経験しましたが、本当に良かったです。このように、学生が挫折を味わいながらも、友達や教員との相互交流の中で、大学に早く馴染み、自分の適性を探っていくプロセスを組織的にサポートしていくことが重要だと思っています。

アカデミック・フリーダムの尊重

——そのような理学部でのご経験をふまえて、教育担当理事としても、本学の学風である「自由」を今まで以上に尊重していこうとお考えでしょうか？

「自由」という言葉ほど難しいものはありません。「自由」とは何をしてもいいという行動の自由を意味するのではなく、科学における各人の自由な発想を意味します。自由で独創的な発想から、社会を変える新たな技術や歴史的な発見など、何が生まれるかわかりません。アカデミック・フリーダムを大学として尊重していきたいと考えています。学問においては、学生と教員は対等であり、自由を尊重する本学の学風の中で、のびのびと学生自身が研究したいテーマに主体的に取り組んでほしいですね。

2：6：2の法則

——教育担当理事としての抱負をお聞かせください。本学の教育の課題をどのように捉えておられますか？

今、感じているのは多様性ということです。近年、本学の学生の学力レベルやバックグラウンド、退学理由は、大変多様になってきました。最近、前教育担当理事の北野先生から産学協働イノベーション人材育成協議会（C-ENGINE）の仕事も引き継ぎました。そこで企業の方とお話する機会があったのですが、企業組織における人材構成には、「2：6：2の法則」があるということでした。「上位2割は優秀、中位6割は手を入れれば機能する、下位2割はもう手を入れない」と。しかし、大学においては最後の2に手を入れないわけにはいきません。最後の2にいる学生をサポートする体制の構築に力を入れていく必要性を強く感じています。本学の学生は、元々能力はとても高いのです。ただ、能力の発揮の仕方や、自分は何が不得手なのかといったことを理解していないこともあります。入ったのが自分の学びたい学科ではなかったという不本意入学の学生もいますし、どうしてもこの学科・系に行きたいというこだわりの強い学生も多いです。学生のつまづきも多様になっており、



そうした学生のモチベーションを全学的にどのように上げていくかが課題です。

オンライン活用の継続とバリエーションの拡大

——コロナ禍の中での教育担当理事就任となりましたが、コロナ禍における教育・授業のあり方をどのように考えておられますか？現時点で、ポストコロナにおける教育・授業についてどんな構想、見通しをもっておられますか？

本学の教員調査からも読み取れるように、コロナ禍で我々は、オンラインを活用した教育に様々なメリットを見出しました。例えば、私が担当した4回生の授業では、PandAを使って資料を提示して、その資料から何が読み取れるかという解説をしました。学生も教室よりも資料が見やすいようで、事前に資料を読み込み、授業で熱心に質問をしてくれました。すぐく学習効果が高いと感じましたね。オンデマンド型授業には、留学生にとっても日本人学生にとっても、何度も見返して学ぶことができるというメリットがあります。

来年度からは対面授業を基本にしたいと考えていますが、我々がコロナ禍で学んだオンラインを活用した教育方法やPandAといった使えるツールは残してどんどん活用していったほうがいいですね。ポストコロナにおいては、授業形態・学習方法のバリエーションが増え、ブレンディッド教育が進んでいくと思います。

教職員の一致団結とこれまでの蓄積

——先生は「教育」の他に、「情報」「図書館」も担当されていますが、これらをどのように関連づけておられますか？

本学がコロナ禍ですぐにオンライン授業や学生支援に対応できたのは、各部署、教職員、非常勤の先生方の素早い対応と協力があつたおかげです。そうした先生方のご努力に加えて、情報環境機構のサポート、高等教育研究開発推進センターのオンラインを活用した教育コンテンツの開発やFD、附属図書館における電子リソースの活用など、今までの蓄積が花開いたということもできるでしょう。今後も世界的にオンラインを活用した教育が、重要なツールの一つとなる以上、教育支援・情報・図書館と各部署との連携を今まで以上に強めながら、部局を越えてより良い教育のために何ができるのかを考えていかなければなりません。

1年生に対するフォローアップ

——特に、今年度前期の学生調査では、1年生が上級生に比べてより多く不安や心身の不調を感じているという結果が出ていますが、それについてどんな対策をお考えでしょうか？

2020年度、1回生においては学生同士で知り合う機会もままならなかったという現状があります。そうした状況下で、オンライン授業に参加できなくなってしまった、実験に來られなくなってしまった学生が増えたという声や、相談にも行かない学生が多くいると様々な部局から伺っています。カウンセリングルームで対応してくださっていますが、十分とは言えません。カウンセリングルームだけでなく、各部署でも引き続き、学生に対するフォローをお願いしたい次第です。例えば理学部では、相談室を設けていて、LINEを活用した週1回の学生同士の談話会を開いてモチベーションを保ったということがありました。また担任制を活用して少



人数で学生同士の交流の機会をもつよう先生方をお願いしていました。

各部署でどんなグループでもいいので、感染対策を講じながらも、学生同士が知り合う場や話せる場を設けてほしいと思います。各学部・学科で教員が10人程度のクラス・ユニット単位で学生の面倒を見ていけば、少しずつ学生同士のネットワークが広がって、大学に馴染んでいくのではないかと思います。

これからのFDについて

——コロナ禍に直面するなかで、本学の先生方は短期間のうちにオンライン授業／ハイブリッド型授業に対応し、教えや学びを止めることなくここまで進んできました。その中では講習会だけでなく先生方による経験の共有・交流も大きな役割を果たしたと思います。先生は、この1年の本学のFDについてどう見ておられますか。また、今後は何が課題になるでしょうか？

コロナ禍で授業のノウハウや各部署の取り組みの学び合いがオンラインで急速に進んだ1年でした。高等教育研究開発推進センターが毎週のように開催した「私のオンライン授業@京大」などの講習会で、各先生方の情報交換の速度が早まりましたね。また録画配信されて、先生方が自分の都合の良い時間に様々な部局の先生の取り組みをオンラインで見られることも、ご多忙な先生方にとっては便利だったと思います。

本学のFDが、今後も各部署をつなぎ、教職員皆さんの協力を得て、発展していくことを期待しています。

(インタビュー：高等教育研究開発推進センター)

*本インタビューの拡大版はこちら：
<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/news/news-1325/>



インタビューこぼれ話

網田村子『数字であそぼ。』小学館

この漫画は、地方から出てきて、吉田大学理学部に入り、最初の数学の授業で落ちこぼれるというストーリーです。理学部の数学の先生が原作に関わっているんじゃないかと思えるくらい、リアルに描かれています。留年は免れましたが、私も主人公と同じような挫折をしましたよ。

(平島理事談)

2. 全学教育シンポジウム

「京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する」

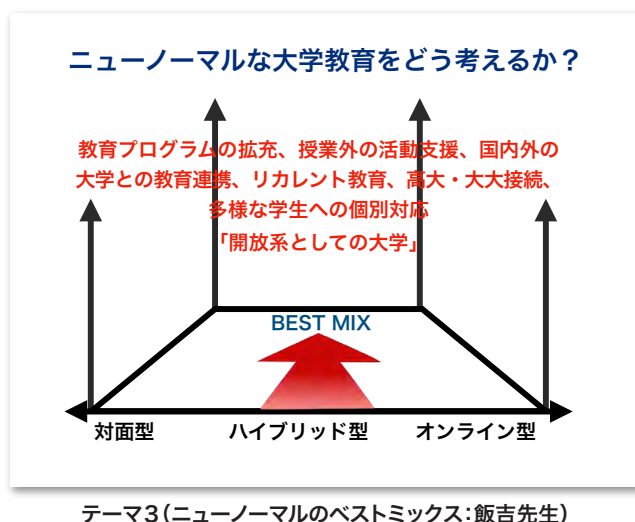
概要

9月11日、教職員349名の参加を得て、第24回全学教育シンポジウム「京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する」をオンラインにて開催しました。

本学では、1996年以来、毎年、全学教育シンポジウムを開催し、教養・共通教育や大学評価など、様々な教育課題を取り上げてきました。そうした中で、今年度は、2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、世界中の大学がオンライン授業を展開する、という未曾有の状況に対応することが求められました。さらに、キャンパスでの対面活動が制約され、授業内外の様々な教育・学習活動や国内外の学生の移動、留学生の行き来等が大きく停滞するという問題から、本学でも全学的な教育支援体制の構築、学生に対する経済的・心理的なサポート体制についても考える必要が出てきました。

そこで、今年度は、「京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する」と題し、今後の本学の「より柔軟で強靱」な教育のあり方や、今後本学で自主的・自発的に進めるべき教育改革・改善の取り組み

の方向性や目的等について、多様な観点から議論することを目指しました。



プログラム

午前の部では、本学の教育の現状や方向性をコロナ後も見据えて論じた北野正雄教育担当理事・副学長(当時、以下同)の基調講演「京都大学の教育の課題と可能性: コロナ禍を踏まえて」に続いて、各部局のオンライン教育やオンライン授業支援の取り組み(工学研究科、教育学研究科、国際高等教育院、情報環境機構、高等教育研究開発推進センター)について、それぞれのリーダーにご報告いただきました。

午後の部は、今回のコロナ禍とそこでの教育の意味を人類史的視点から捉えた山極壽一総長(当時)による基調講演「人類の未来を拓く教育とは何か」から始まりました。続いて「大学と社会のこれから: withコロナ & afterコロナの時代に」というテーマの下で、湊長博プロボスト・次期総長(当時)、稲垣恭子教育学研究科教授、出口康夫文学研究科教授・人社未来発信ユニット長に鼎談していただきました。

その後、「コロナ禍における京大の教育の現状と課題」というテーマで、山田剛史高等教育研究開発推進センター准教授(当時)より、参加者とMentimeterを使って意見共有しながら、教員調査・学生調査の結果から見てきた現状や課題について報告しました。最後に、「京都大学の教育のニューノーマル」について、山極総長、北野理事、川添信介学生担当理事(当時)、喜多一情報環境機構長に

ご登壇いただき、飯吉透高等教育研究開発推進センター長の進行でパネルディスカッションを行いました。参加者の意見に対するレスポンスもまじえながら、活発な意見交換がなされました。



参加者の声

開催後は、参加者の感想・意見をうかがうために、オンラインアンケート調査を実施しました（有効回答数117件、回収率33.5%）。まず、「今回のシンポジウムが教育改善に役立つ内容かどうか」では、約8割の参加者が「とても役立ちそうだ」（39名）「まあまあ役立ちそうだ」（63名）と回答しており、全体として好評価を得ることができました。

興味深かったプログラムでは、山極総長、北野理事、川添理事、喜多情報環境機構長、飯吉高等教育研究開発推進センター長によるパネルディスカッションのテーマ3「京都大学の教育のニューノーマルとは」が78名、山極総長の基調講演2「人類の未来を拓く教育とは何か」が75名と、ほぼ同数で続きました。興味深かった点に関する自由記述では、「現在の京都大学の教育の問題や今後の展開をわかりやすく説明していただき興味深かった。また、コロナ禍における取り組みの概要・評価や問題点が認識できた。オンライン教育が、学生にも教員にも満足度が高いという点は非常に良いと思いました。」（基調講演1）、「PandAのシステム構築やZoomとの連携について、以前から取り組まれていたことで、スムーズにオンライン教育が実施できたのだとわかった。また、大嶋先生のお話にあった自動音声認識・英語翻訳授業支援システムは完成すれば非常に有用だと思いますので、是非使用してみたいと考えます。」（テーマ1）、「工学研究科で実施されたオンライン試験の情報がありがたかったです。」（テーマ1）、「教員、学生が相互に刺激し合うのが教育だという言葉に刺激を受けた。」（基調講演2）、「京都大学の文化が維持できるような手法は、個人的には非常に良いと感じます。研究室に居つく学生が残念ながら最近は少ないと感じますので、オンラインvs対面ということだけではなく、学生をそうなるようにどう導くかや、様々なセキュリティを緩和する必要もあるかと存じます。」（テーマ2）、「1年生は他の学年に比べ、不安や身体的・メンタル的な不調がでやすいということがわかり参考になった。」（報告とインタラクション）、「理事の先生方がどのように考えていらっしゃるか「肌」で感じることができて、非常に勉強になりましたし、安心もしました。こういったシンポジウム自体も、学生に対する教育の題材になるのではないかと思います。」（テーマ3）、といった多様な意見が聞かれ、プログラムは概ね好ましく評価されていました。

「今後、このようなシンポジウムを開催する場合に取り上げてほしいテーマ」については、コロナ禍で大学に問われた教育の価値―「京大の教育」「京大らしさ」とは何か―といった原点をもう一度議論したいという意見が多くありました。「今年の続きで、オンラインを含めた京大ならではの教育とは何かを取り上げてほしい。」「教育システムの根本（例えば、大学院を優秀な人材しか進学できない経済的・キャリア的に魅力的な場所にする）の変革が求められていると思う。その様な、大きなテーマを大学全体のイベント（例えばシンポジウム）で問題提起することが大切だと思う。」「教育「方法」にとどまらず、それを下支えている「哲学」的な議論も活発になされるといいと思う。」「京大らしさ」とはなんなのか、「京大の価値とは何なのか」もっともっと教員が意識していくべきだと思う。」「京大が目指す教育原理、人材養成目的を明確化し、京大らしい教育システム。」などです。

初めてのオンライン開催でしたが、「オンライン参加の方がよいと感じた」（88名）、「（コロナの問題さえなければ）やはり対面開催の方がよいと感じた」（11名）と、概ね好意的に捉えられていました。対面とオンラインのハイブリッド型の開催に関する要望としては、次のような意見が挙げられました。「本日の議論にもありましたが、「ハイブリッド」が大切ではないかと感じました。Mentimeterの利用は、たくさんの「忌憚なき」意見を取り入れられていいと思いました。」「対面は対面の良さがあるのでハイブリッド型がよい。」「この規模だと、オンライン+双方向性をさらに進めると、対面よりかえって良いかもしれない。」などです。こうしたオンラインでのメリット、対面でのメリットを考慮しつつ、引き続き開催形式・方法も含めて充実した内容になるよう改善を続けていきたいと思います。

当日の詳細な報告書は下記からご覧になれます。

全学教育シンポジウム：

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php>



2. 全学教育シンポジウム

プログラム [司会進行：佐藤 万知 高等教育研究開発推進センター准教授]

午前の部

10:00～ **開会挨拶・基調講演 1：「京都大学の教育の課題と可能性：コロナ禍を踏まえて」**
北野 正雄 教育・情報・評価担当理事、副学長

10:35～ **テーマ1：「オンライン教育の取組と経験を振り返る」**（パネルディスカッション）

《モデレーター》

松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授

《パネリスト》

「PandA “Behind the Scene”」

梶田 将司 情報環境機構教授

「高等教育研究開発推進センターのオンライン授業支援」

田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授

「オンライン教育の取組と経験を振り返る」

大嶋 正裕 副理事、工学研究科長

「教育学研究科・教育学部の取組と課題」

西岡 加名恵 教育学研究科教授

「オンライン日本語授業の取組事例及び前期授業の検証」

パリハワダナ・ルチラ 国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター教授

12:05～ 昼食・休憩

午後の部

13:00～ **基調講演 2：「人類の未来を拓く教育とは何か」**
山極 壽一 総長

13:35～ **テーマ2：「大学と社会のこれから：withコロナ & afterコロナの時代に」**（鼎談・報告）

《パネリスト》

湊 長博 プロボスト、戦略調整・研究・企画・病院担当理事、副学長、次期総長

稲垣 恭子 教育学研究科教授

出口 康夫 戦略調整担当理事補、人社未来発信ユニット長、文学研究科教授

14:25～ 休憩

14:40～ **報告&インタラクティブ「コロナ禍における京大の教育の現状と課題」**
《報告者》

山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授

15:25～ **テーマ3：「京都大学の教育のニューノーマルとは」**（パネルディスカッション）

《パネリスト》

山極 壽一 総長

北野 正雄 教育・情報・評価担当理事、副学長

川添 信介 学生・図書館担当理事、副学長

喜多 一 情報環境機構長

《モデレーター》

飯吉 透 教育担当理事補、高等教育研究開発推進センター長、教授

16:55～ 閉会挨拶

17:00～ 終了

3. オンライン/ハイブリッド型授業を支援するための学内講習会

「コロナ危機の中でも学び・教え続ける」

新型コロナウイルス感染症の拡大のなか、本学では、3月31日に、前期授業の5月7日開講が通知され、4月3日には、「学生に向けた総長メッセージ」が出されました。その中で山極壽一総長(当時)は「オンライン授業、オンライン教育リソースで学修機会の確保を」と呼びかけられました。そのための全学サポートにあたることになったのが、情報環境機構と高等教育研究開発推進センター(以下、「高等教育センター」)です。情報環境機構はインフラ・テクノロジー支援、高等教育センターは授業支援を担当し、両組織で連携・協力して全学サポートを行って来ました。

授業支援で大きな役割を果たしてきたのが、3月26日に立ち上げられたサポートサイト「Teaching Online@京大」と、3月27日から始まった学内講習会です。学内講習会は平均してほぼ週に1回実施され、2021年1月8日現在、計41回に上っています(表1)。すべての講習会が録画され、資料とともにTeaching Online@京大の講習会のページ(<https://www.higheedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/guidances.php>)にアップされています。



表1 学内講習会一覧 (2020.3.27~2021.1.8) *シリーズごとに色分け

No.	日程	シリーズ名	副題またはテーマ	講師(所属・職階)	参加者数	視聴数(1/12)
1	2020年 3月27日	オンライン授業に関する講習会・相談会(第1回)	—	飯吉透・松下佳代・田口真奈・酒井博之 (高等教育研究開発推進センター[以下、センター])	70	986
2	3月27日	オンライン授業に関する講習会・相談会(第2回)	—	同上	14	280
3	3月31日	オンライン授業に関する講習会・相談会(第3回)	—	同上	22	540
4	4月 2日	Teaching Online Workshop@KU(講習会)	外国人教員向け(英語)	飯吉透(センター教授)	17	125
5	4月 9日	オンライン授業に関する相談会(第1回)	—	飯吉・松下・田口・酒井・山田剛史(センター)	25	39
6	4月17日	部局向け講習会・相談会(地球環境学堂)	—	飯吉・松下・田口・酒井(センター)	40	—
7	4月23日	私のオンライン授業@京大(第1回)	「有機化学II」(工学部工業化学科3年生配当の専門科目)のPandaA・Zoom活用例	杉野目道紀(工学研究科教授)	130	248
8	4月27日	TA講習会(第1回)	TAとしてオンライン授業を支援する	松下・田口・佐藤万知(センター)	500	269
9	4月30日	私のオンライン授業@京大(第2回)	教育学研究科・新型コロナウイルス対応WG	西岡加名恵(教育学研究科教授)、 岡邊 健(同学科准教授)、久富 望(同学科助教)	115	114
10	5月 1日	部局向け講習会・相談会(教育学研究科)	—	飯吉・松下・田口・酒井(センター)	64	—
11	5月11日	私のオンライン授業@京大(第3回)	オンライン授業での板書	藤澤和謙(農学研究科准教授)	146	117
12	5月13日	TA Workshop	"Supporting Online Course as TA"(英語)	佐藤(センター)	65	28
13	5月22日	私のオンライン授業@京大(第4回)	PandaA課題ツールの便利な使い方	喜多 一(情報環境機構長)、酒井・岡本雅子(センター)	141	92
14	5月25日	オンライン授業に関する相談会(第2回)	—	飯吉・松下・田口・酒井・山田(センター)	76	27
15	5月28日	私のオンライン授業@京大(第5回)	実験・演習科目でのオンラインの取組 (オンデマンド、実験キット)	酒井 敏(人間・環境学研究科教授)	75	101
16	6月 3日	ミニディスカッションフォーラム(第1回)	今、京大の学生に必要な支援・配慮を考える	川添信介(学生担当理事)、北野正雄(教育担当理事)	101	45
17	6月 4日	私のオンライン授業@京大(第6回)	物理学教室での仮想的な実験実習と課題提出	田島 治(理学研究科准教授)	93	71
18	6月 9日	オンライン授業に関する講習会	学習評価	山田・佐藤(センター)	127	39
19	6月12日	オンライン授業に関する講習会	障害学生支援	村田 淳(障害学生支援ルーム准教授)	57	12
20	6月16日	オンライン授業に関する相談会(第3回)	—	飯吉・松下・田口・酒井・山田(センター)	44	17
21	6月19日	ミニディスカッションフォーラム(第2回)	学生・教員間、学生・学生間のコミュニケーションを どう促進・支援するか	中川純子(カウンセリングルーム准教授)、 服部憲児(教育学研究科准教授)、安里和晃(文学部准教授)	67	23
22	6月24日	ミニディスカッションフォーラム(第3回)	オンライン授業で学生はどう学んでいるか	穴倉光広・坂上貴之(理学研究科教授)、 北田 雅(経済学研究科講師)	59	18
23	6月30日	講習会(オンライン試験の方法)	オンライン試験/PandaA テスト・クイズツールの利用法	梶田将司(情報環境機構教授)	272	76
24	7月 3日	ミニディスカッションフォーラム(第4回)	学生に図書館をどう利用してもらうか	北村由美(附属図書館研究開発室准教授)、 中田理映子(附属図書館利用支援課利用支援掛長)	63	19
25	7月 7日	ミニディスカッションフォーラム(第5回)	コロナ禍の中で学生の生活とそれへの支援	國見伸行(京都大学生協専務理事)、 若林靖永(経営管理大学院経営研究センター長・京都大学生協理事長)	57	18
26	7月15日	私のオンライン授業@京大(第7回)	オンライン試験	山本量一(工学研究科教授)	83	42
27	7月20日	「オンライン授業に関する相談会」第4回	オンライン試験・評価	梶田将司(情報環境機構教授)・山田(センター)	54	25
28	9月 4日	ハイブリッド型授業講習会(第1回)	組み合わせ方のパターンごとに必要な準備、 方法、考慮すべき点	北野正雄(教育担当理事)、喜多一(情報環境機構長)、 中村素典(情報環境機構教授)、飯吉・田口(センター)	279	169
29	9月17日	ハイブリッド型授業体験相談会(第1回)	ミニレクチャー・相談会・体験会	中村素典(情報環境機構教授)、酒井・田口(センター)	103	39
30	9月25日	こんなこともできる!オンライン授業(第1回)	オンラインでも双方向講義? オンライン授業の様々な工夫	舟橋春彦(国際高等教育院教授)、松下・田口(センター)	93	26
31	9月30日	私のオンライン授業@京大(第8回)	大講義「生物学のフロンティア」でのオンライン授業	高橋淑子(理学研究科教授)	74	26
32	10月 7日	TA講習会(第2回)	TAとしてオンライン授業/ハイブリッド型授業を支援する	佐藤・田口(センター)	139	15
33	10月15日	こんなこともできる!オンライン授業(第2回)	オンライン授業でビデオ教材を扱う方法	森村吉貴(情報環境機構センター准教授)	68	28
34	10月21日	こんなこともできる!オンライン授業(第3回)	BookRoll活用法	緒方広明(学術情報メディアセンター教授)	50	23
35	10月29日	私のハイブリッド型/オンライン授業@京大(第9回)	ハイブリッド型授業をiPadを活用して乗り切る方法	喜多千草(文学研究科教授)	80	56
36	11月10日	私のハイブリッド型/オンライン授業@京大(第10回)	ハイブリッド型授業における感染拡大防止への取組	山下富義(薬学研究科教授)	67	14
37	11月20日	ポストコロナの大学授業(第1回)	オンラインではみえづらい学生の考えを引き出す工夫	田口・鈴木健雄・長岡徹郎(センター)	62	22
38	12月 3日	私のハイブリッド型/オンライン授業@番外編	"Zoom + α"の版大・岩居先生からノウハウを学ぶ	岩居弘樹(大阪大学サイバーメディアセンター教授)	53	19
39	12月16日	ポストコロナの大学授業(第2回)	簡単に作れるオンデマンド型ビデオ教材	酒井・岡本・藤岡千也・緒方孝亮(センター)	74	16
40	12月22日	ポストコロナの大学授業(第3回)	「書いて終わり、ではもったいない!」 学生同士のピアレビューによるレポートの改善	田口(センター)、岩田貴帆(教育学研究科院生)、 柴田 悠(人間・環境学研究科准教授)	47	13
41	2021年 1月8日	私のハイブリッド型/オンライン授業@京大(第11回)	教職協働によるオンラインでの記述試験	橋本佳幸(法学研究科教授)	70	7

3766 3837

3. オンライン／ハイブリッド型授業を支援するための学内講習会



TeachingOnline@京大の「学内講習会」のページから

6つのシリーズ

講習会は最初の5回は対面で行われ、YouTube Liveで配信されましたが、6回目(4/17)からはZoom配信になりました。学内講習会には6つの異なるシリーズがあります。

(1) ハイブリッド型／オンライン授業に関する講習会・相談会

前期は「オンライン授業に関する講習会・相談会」でしたが、後期からは、ハイブリッド型も加わったので、まとめて「ハイブリッド型／オンライン授業に関する講習会・相談会」と呼ばれています。

このシリーズは主に高等教育センターの教員・スタッフで行われてきました。中心に据えられたのは、「コロナ危機の中でも学び・教えられる」ことでした。



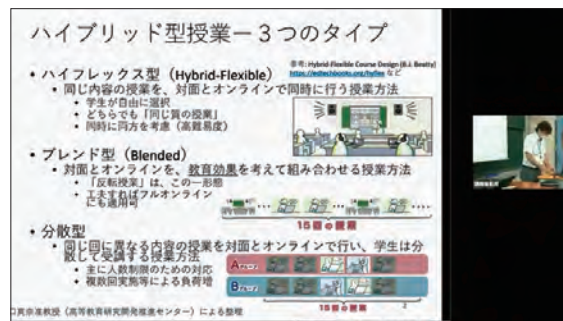
第1回講習会・相談会(2020年3月27日)の様子

最初は、「コロナウイルス状況下での京大の授業」「オンライン授業と単位制度」「オンラインを活用した授業のタイプ：同時双方向型とオンデマンド型」「具体的な手続きとティップス：Zoom、PandA

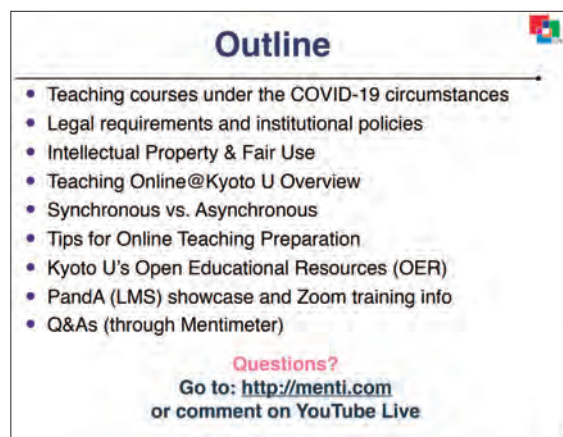
との連携」といった基本的な内容から始まりました(3/27・31)。同時に、「相談会」だけの回も設け、オンライン授業を実施するにつれて生じるさまざまな疑問や困りごとにも対応する機会が作られました(4/9、5/25、6/16、7/20)。

ある程度、基本的な内容が押さえられてからは、個別のトピックに話題が移っていきました。例えば、学習評価(6/9)、障害学習支援(6/12)、オンライン試験／PandA テスト・クイズツールの利用法(6/30)などです。後ろの2つは、障害学生支援ルームと情報環境機構の先生方に講師を務めていただきました。

後期は対面とオンラインを組み合わせる「ハイブリッド型授業」が増えることが見込まれたため、9月には、情報環境機構と高等教育センターの共催で、ハイブリッド型授業の講習会(9/4)、体験相談会(9/17)を実施しました。高等教育センターでは、ハイブリッド型授業を、「ハイフレックス型」(同じ内容の授業を、対面とオンラインで同時に行う授業方法)、「ブレンド型」(対面とオンラインを、教育効果を考えて組み合わせる授業方法)、「分散型」(同じ回に異なる内容の授業を対面とオンラインで行い、学生は分散して受講する授業方法)の3タイプに分けて捉えています。今のところ、ハイフレックス型とブレンド型が多いようです。体験相談会では、希望者には対面で機材やその扱い方を見ていただけるよう、相談会自体をハイフレックス型で行いました(9/17)。



この講習会・相談会のバリエーションとして、外国人教員向けに英語による「Teaching Online Workshop」を4/2に実施しました。また、出張講習会のご要望を募り、「部局向け講習会・相談会」を地球環境学(4/17)と教育学研究科(5/1)で行いました。



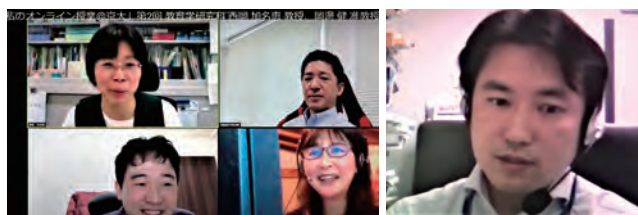
(2) 私のハイブリッド型／オンライン授業@京大

4/23から新シリーズ「私のオンライン授業@京大」を始めました。これは、さまざまに工夫してオンライン授業に取り組んでおられる個人あるいは組織をお招きして、その工夫から学びあい、大学全体で共有していこうというものです。後期からはハイブリッド型授業も対象に加えたので、「私のハイブリッド型／オンライン授業@京大」と名称を変えました。

4/23から1/8までで11回+1回実施しています。「+1回」というのは、一度だけ、大阪大学サイバーメディアセンターの岩居弘樹教授をゲストとして、番外編「Zoom + α 」の阪大・岩居先生からノウハウを学ぶを行ったためです。それ以外はすべて、学内で面白くて役に立つ取り組みをなさっている先生や部局をお招きして、お話を伺ってきました。

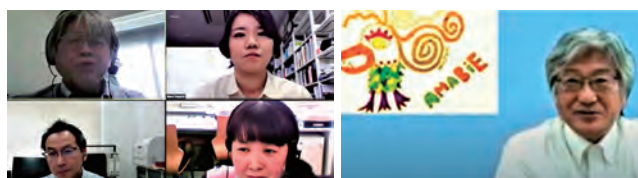
第1回を除き、お昼休みに時間を設定し、ビデオオフにして昼食を取りながら気軽に参加していただけるようにしました。そのせいもあってか、毎回50～150人ほどの参加があり、チャットを使って活発な質疑応答がかわされています。

これまで扱ったテーマは、Panda・Zoomの使い方(4/23)、部局内での新型コロナウイルス対応WGの活動(4/30)、オンライン授業での板書(5/11)、Panda課題ツールの便利な使い方(5/22)、実験・演習科目でのオンラインの取組(5/28)、仮想的な実験実習と課題提出(6/4)、オンライン試験(7/15)、大規模講義でのオンライン授業(9/30)、ハイブリッド型授業をiPadを活用して乗り切る方法(10/29)、ハイブリッド型授業における感染拡大防止への取組(11/10)、Zoomや各種オンラインツールの使いこなし方(12/3)、教職協働によるオンラインでの記述試験(1/8)です。実に多様なテーマがカバーされていることがわかりいただけるかと思います。



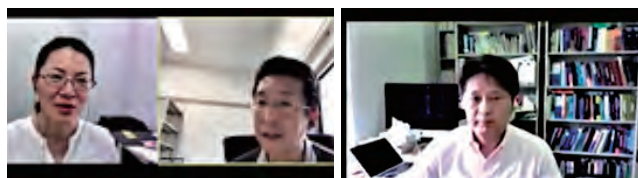
第2回(4/30)

第3回(5/11)



第4回(5/22)

第5回(5/28)



第6回(6/4)

第7回(7/15)



第8回(9/30)



第9回(10/29)



第10回(11/10)



番外編(12/3)



第11回(1/8)

「私のオンライン授業@京大」の第1回(4/23)では、工学研究科教授で教育担当理事補(当時)でもある杉野目道紀教授をお招きしました。杉野目先生は、5月初旬の前期授業の一斉開始に先駆けて4月中旬からPandaとZoomを用いて授業を開始されており、先行事例としてその知見を話していただきました。また、杉野目先生ご自身あるいは参加者の方々が感じていらっしゃる課題を共有し、その解決策を議論する場としても、この回は設定されました。

杉野目先生の実践紹介パートでは、①オンライン授業のデザイン、②私のPanda、③開講前の準備、④講義中、⑤講義後の作業、⑥今後の技術的課題という6つの項目について紹介いただきました。

教育の質を維持したいという気持ちから、どうオンライン授業をデザインしているのか、そのためにどのような準備を行い、どう授業を実施しているのかについて、お話しいただきました。具体的なPandaやZoomの設定・使用方法もご紹介いただきました。

先生が一番に課題と感じておられたのは、オンラインでどう手軽かつ効果的に板書ができるかという点でした。実践紹介後のディスカッションパートでは、その課題に対して複数の参加者より提案があり、先生ご自身も参考になったと仰っていました。



第1回(4/23)

3. オンライン／ハイブリッド型授業を支援するための学内講習会

(3) ミニディスカッションフォーラム

「今、京大の学生に必要な支援・配慮を考える」

キャンパスライフがない状態で過ごす本学の学生をどのように支援していけるのか、また、大学・部局・教職員の立場で、どのような支援の取り組み・工夫が現在進められているのかについて、学内事例・意見・情報の共有を行う場として設けられたのが、ミニディスカッションフォーラムです。第1回には教育担当理事(当時)の北野正雄先生と、学生担当理事(同)の川添信介先生に話題提供をしていただきました。第2回から第5回までのディスカッションフォーラムでは、学生総合支援センター、附属図書館、生協による話題提供のほか、教育学部、文学部、理学部、経済学部からそれぞれの部局独自の学生支援の取り組みをご紹介いただきました。両理事を含め、多くの教職員に積極的にご参加いただき、皆で議論を深めました。



(4) TA講習会

「TAとしてハイブリッド型／オンライン授業を支援する」

オンライン授業の円滑な実施にはTAのサポートが有効です。そこで、どのようにオンライン授業の支援をすればいいのかに関するTA向けの講習会を前期・後期のあわせて2回実施しました。後期については、ハイブリッド型授業を支援するための基礎的な知識・スキルを加えました。

TAだけではなく、TAとどのように協働すればよいのかを探る教員からの参加もありました。特に第1回のTA講習会は、想像をはるかに上回る参加があったため、あとから録画ビデオを見ていただくことで対応せざるを得ませんでした。また、TAの中には、聴覚障がいをもつ学生もいたため、録画ビデオに字幕をつけることで対応するなど、新たな課題も見つかりました。

(5) 「こんなこともできる!オンライン授業」

後期に入る直前の9月に3回にわたって行ったのが、「こんなこともできる!オンライン授業」と名付けた講習会です。後期から初めてオンライン授業を実施される先生向けには前期の録画ビデオとウェブページで対応し、この講習会は前期でオンライン授業にだいたい慣れたという先生に向けて実施しました。

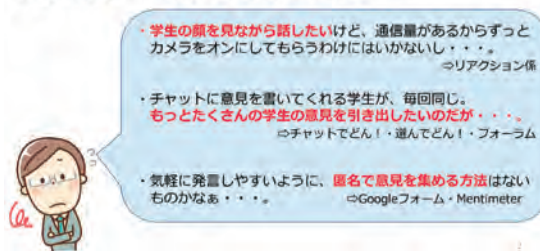
第1回は、オンライン授業で可能なことを見取り図にして示し、そ

うちのいくつかを事例やデモで提示しました。また、第2回はビデオ教材をオンラインで使うためのノウハウや注意事項について取り上げました。第3回は、BookRollの開発者である学術情報メディアセンター緒方広明教授に、BookRollでどのようなことができるのかをデモを交えて授業例をご紹介いただきました。

(6) 「ポストコロナの大学授業」シリーズ

11月末に開始したシリーズ「ポストコロナの大学授業」はポストコロナを見据えて、授業形式が対面であれ、オンラインであれ、ハイブリッド型であれ、大学の授業や学生の学びを向上させるのに役立つ方法をご紹介していくものです。第1回は「オンラインではみえづらい学生の考えを引き出す工夫」と称して、授業中または授業後に学生からのアウトプットを引き出す具体的な方法や工夫を、参加者の協力を得ながら実演しました。ビデオをオンにしていながらのインタラクティブなワークショップとなりました。第2回は本学のOCW、MOOC、SPOCの制作や運用を担当してきたスタッフによる「簡単に作れるオンデマンド型ビデオ教材」を実施しました。ビデオ教材を作成する際のノウハウやちょっとした工夫・コツ、また、作成したビデオ教材をインターネットで公開する場合の注意点などを取り上げました。第3回「書いて終わり、ではもったいない!学生同士のピアレビューによるレポートの改善」では、学生のレポートを改善するために、学生同士が相互評価をする実践を3年間にわたり、対面授業、オンデマンド型授業、同時双方向型授業で実践してきた授業者とTAから、その具体的な方法を紹介いただきました。

こんなお悩みはありませんか?



いずれの講習会もテンプレートやワークシート、事例集などが配布され、すぐにも役立てていただけることが目指されました。資料と動画満載のTeaching Online@京大の講習会のページ、ぜひご利用ください。

4. PandA・Zoom講習会

COVID-19 対応としてのオンライン授業と教授者の支援

2020 年になって世界的なパンデミックへと発展した新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) への対応として、本学においても授業のオンライン実施を余儀なくされました。COVID-19 の授業への影響については、事態の深刻化にともない、2020 年度前期の授業の開始を一部、4 月から開始した学部等もあるが 5 月 7 日まで遅らせ、さらに学期当初は全面オンライン実施という形での開講を余儀なくされ、前期の授業については教室での定期試験実施も困難となり、レポート課題などでの成績評価に加え、オンライン試験なども試みられました。また、その後、状況の一時的な緩和や感染症への理解の深まりから、対面授業の実施も検討され、2020 年度後期は科目内容に配慮してハイブリッド、ハイフレックス方式で対面とオンライン授業を併用する授業も行われています。

オンライン授業を支える情報サービスとして、情報環境機構では全学に提供する学習支援システム (LMS) を 2009 年度に導入しました。2013 年度からはオープンソースの LMS である Sakai をベースとした PandA を稼働させるとともに、教務情報システム KULASIS と科目や履修簿を連携する形で運用を強化しました。さらに 2018 年度には PandA と連携する形で利用できる動画配信サービス Kaltura なども導入しています。その後、学術情報メディアセンター 緒方研究室で運用する PDF 資料の配信サービス BookRoll と連携を行い、これに加え、2020 年度には、同時双方向型での授業実施のため Web 会議サービス Zoom のライセンスを急遽導入し PandA と連携運用しています。

しかしながら、PandA を利用している授業は 2019 年度末でも科目全体の 2 割以下にとどまっており、一部、先導的に PandA を利用していた教員はいたものの、大多数の教員は 2020 年度のオンライン授業の実施に際して PandA の利用方法を学ぶ必要がありました。Zoom については急遽導入したことにとともに、ほぼすべての教員が利用方法を学ぶことが求められました。

このような状況の中で情報環境機構では高等教育研究開発推進センターと連携しながら PandA や Zoom の利用方法を教員等に習得いただくために以下のような FD/SD 活動を展開しました。

- PandA や Zoom などの利用方法のための講習会の実施
- PandA, Kaltura, Zoom の利用方法をまとめた Web サイトの開設とコンテンツの整備
- PandA の学習用のサイトの PandA 上での構築

PandA・Zoom 講習会の実施

2019 年度末から 2020 年度の開講までの期間に以下のような日程で講習会を実施しました。

多くの教員がまずはオンライン授業を開始しなければならないという状況に配慮して、PandA 上のコースサイト開設から授業資料

の配布、課題の設定と採点、Zoom の操作と PandA からのミーティングの設定など当面、必要となる内容に焦点をあてる形での講習を対面とオンラインを併用しながら実施しました。

- PandA 講習会 3 月 19 日、24 日、27 日、30 日、31 日、4 月 1 日、3 日、6 日、5 月 20 日に実施
- Zoom 講習会 4 月 2 日、3 日、10 日、23 日、24 日、5 月 20 日

これらの講習会には合計約 3,140 名の教員が参加しました。また TA を主な対象とした講習を 5 月 19 日、5 月 20 日に実施し、21 名の参加がありました。

また Kaltura については以下を実施しました。

- 3 月 18、19 日 Kaltura 講習会、合計参加者 24 名

このほか、また、新入生向けに PandA と Zoom を用いた模擬授業体験会を国際高等教育院、教育推進・学生支援部と連携して 4 月 21 日に開催し、2,100 名の参加がありました。

前期の半ばには前期試験のオンライン実施なども視野に入れ、以下の講習会を高等教育研究開発推進センターと共催で実施し、300 名の参加者がありました。

- 6 月 30 日、はじめての PandA オンライン試験講習会

さらに、後期のみ授業を担当する教員もおられることに配慮し、後期においても以下の講習会を実施しています。

- 9 月 18 日、はじめての PandA・Zoom 講習会 (対面・オンライン同時開催、高等教育研究開発推進センターと共催)、参加者 90 名
- 9 月 18 日、9 月 23 日、PandA 利用した映像配信 (Kaltura) 講習会 (オンライン開催)、参加者合計 18 名

なお、後期に向けては対面と Zoom を用いたオンライン授業を併用するハイブリッド／ハイフレックス型の授業の実施などについても配慮して情報提供を行っていますが、実際の授業「全学共通科目 プログラミング (クラウド計算)」のハイブリッド型での実施を 10 月 19 日に参加可能な形で公開しました。

4. PandA・Zoom講習会

PandA, Kaltura, Zoom の利用方法をまとめたWEB サイトの開設とコンテンツの整備

PandA や Kaltura については、導入時からオンラインマニュアル等を情報環境機構の Web サイトで公開しています(下図左)が、これに加え、状況の変化に即応してコンテンツを整備し、利用者に提供するために「京都大学 PandA / Zoom / Kaltura利用支援サイト」

という Web サイトを別途用意しました(下図右)。内容をそれぞれのサービスに精通したスタッフが随時追加、更新する即応性に対応するため、学外の Web サイトサービスを利用しています。



PandA の学習用のサイトの PandA 上での構築

Zoom でのオンライン講習会の周知の手段を兼ねて、教員が自由にサインアップできる PandA 上のサイトとして「PandA 101」を開設しています。ここでは Zoom 講習会の入り口とすることに加え、お知らせ、資料配布、課題の例示、フォーラムを使った Q & A など、講習ビデオの Kaltura での閲覧など、PandA について体験的に学んでもらうサイトとして運用しています。同サイト登録者は 2021年1月26日現在で 2,094 名に上っています。

このほか、教務系の事務職員は教務情報システム KULASIS には精通していますが、授業内で使われる LMS についての経験がほとんどなく、学生や教員を支援するために PandA について学びたいという声に応えて、学習用サイトとして「PandA教務フォローアップサイト」を開設し、資料閲覧や課題の提出などを体験できるように設定しました。これに各学部、研究科の教務系職員を登録して PandA の主要機能とその操作を体験する場としました。

授業のオンライン化による FD の新しい形

授業のオンライン実施に伴い、PandA や Zoom についての FD への参加者は数千人規模に上っています。これは単に、授業をオンラインで実施しなければならないという必要性のみならず、FD 活動そのものをオンラインで実施する基盤としても、オンライン授業のための ICT 環境が極めて有用であることも示しています。複数のキャンパスや隔地の研究所・センターなどを抱える本学にとってオンラインでの FD が有効であるといえます。また、教務系の職員に PandA についての理解を深めていただいたことにより、教員や学生からの問い合わせに教務系職員がある程度対応可能となり、全学規模で運用されるこれらのシステムについて、運用者への問い合わせ内容そのものが変容し業務品質が改善できたことや教職協働でのオンライン試験の実施などの事例も見られるようになってきました。

5. 教員調査

調査概要

2020 年度本学では、その初頭から現在に至るまで新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、特に前期では、対面授業に代わってフルオンライン授業がおこなわれました。そこで、前期に行われた授業について、次の目的のために、オンライン授業に関する教員調査が行われました。実施に際しては、本学高等教育研究開発推進センターと情報環境機構が中心となり、その設計や作成、結果集計・分析を行いました。

- ① 本学におけるオンライン授業の実態と課題の把握
- ② 2020 年度後期以降の当面の授業実施に向けての方針策定と支援強化

本調査結果により、1) 大学執行部、学部・研究科、国際高等教育院への教育実施のための情報提供、2) 教育のための情報環境の整備、改善、3) 個々の教員へのフィードバックによる授業実施方法の立ち位置確認や改善の契機の提供の充実が目指されました。

本調査は、オンライン調査の形式で2020年7月22日～8月5日に行われました。SurveyMonkey 社が提供するアンケートプラットフォームを利用して作成し、日本語版と外国人教員向けに英語版が用意されました。作成した Web アンケートのリンクを、KULASIS を通じて前期の授業担当者宛に通知しました。調査対象者数は、前期の授業担当者 1,775 名（常勤 1,472 名、非常勤 303 名）でした。そのうち実際に回答した数（回答率）は、全体で 1,232 名（69.4%）、内訳は常勤教員が 996 名（65.6%）、非常勤教員 266 名（87.8%）であり、不備のあった回答を除外した有効回答者数（回答率）は、全体で 1,182 名、そのうち常勤教員が 927 名（調査対象内 63.0%／有効回答内 78.4%）、非常勤教員 255 名（調査対象内 84.5%／有効回答内 21.6%）でした。回答者の職階の内訳は図 1 の通りです。

さらに、以下のような内容を調査しました(図 2)。回答者である教員には、項目 3 で、担当科目の中で学部向けの科目（大学院課程のみを担当している場合は、大学院担当科目）のうち、オンライン授業を実施している科目を“1つ”選んでいただき、その科目に対して、項目 4 以降を答えていただくという形式をとりました。

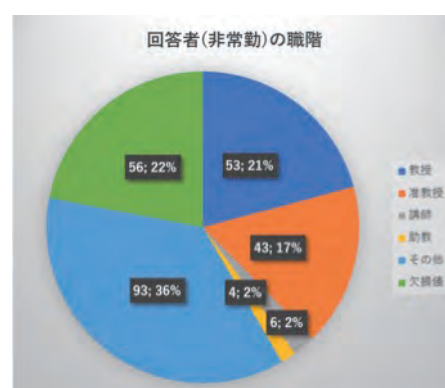


図1 回答者の職階(上:常勤、下:非常勤)

1. 基本情報（氏名、常勤・非常勤の別、部局、職階）
2. オンライン授業を準備・実施する際に利用したサポート
3. 対象科目の絞り込み（科目区分、科目名）
4. 対象科目の基本情報（授業種別、対象部局・学年、履修者数・出席者数等）
5. オンライン授業の実施方法
6. 実施場所
7. 準備負担
8. 準備時間
9. 情報共有
10. 同時双方向型への質問（方法、形態、構成、討論、録画等）
11. オンデマンド型への質問（メディア、方法、連絡、双方向性等）
12. 教材とその取扱い（著作物の種類、配付・提示、注意・指示等）
13. 学習の評価（基準、課題の頻度・提出・返却、小テストの方法等）
14. PandAとKULASISで使用しているツール
15. TAの利活用
16. 授業の効果（良かった点(教員・学生)、困っている点)
17. オンライン授業についての今後の見込み
18. オンライン授業実施のための環境と支援
19. 今後の授業で取り入れていきたいこと (FA)
20. 意見・要望・課題 (FA)

図2 調査項目の一覧

5. 教員調査

主な調査結果

＜オンライン授業のタイプとその準備時間、各々の特徴＞

オンライン授業のタイプは、「主に同時双方向型」、「主にオンデマンド(動画教材)」、「主にオンデマンド型(テキスト教材)」、「混合型(同時双方向+オンデマンド)」の4タイプに分け、どの形態で実施したかを問いました。その結果、最も多かったのは「主に同時双方向型」で約6割であり、その他の3タイプはいずれも約1割強で、「主にオンデマンド型(動画教材)」と「主にオンデマンド型(テキスト教材)」を併せると4人に1人がオンデマンド型を選択していました(図3)。部局毎に異なる可能性が高いですが、本学全体では、前期は同時双方向型で行われたことが分かりました。

また、オンライン授業のタイプ毎に、オンライン授業(1回分)を準備(課題の採点やフィードバックの準備も含む)するのに要する時間が平均どの程度かという問い(図2の項目8)については、同時双方向型では4人に1人が、オンデマンド型では約半数が、「240分以上」と答えており、特にオンデマンド型の授業では、授業準備にかかる時間が多かったようです(図4)。

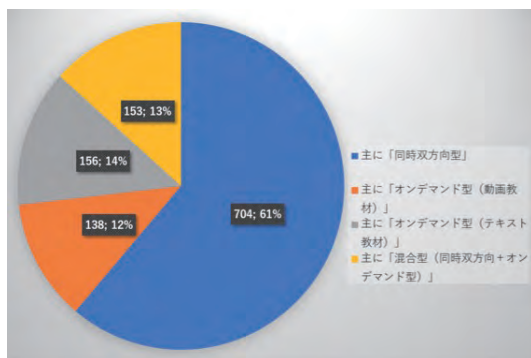


図3 オンライン授業のタイプ(N=1,151)

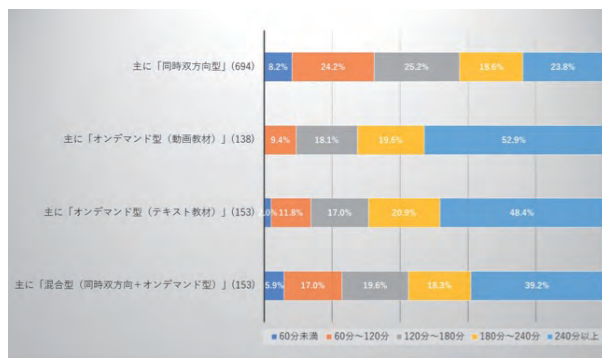


図4 オンライン授業のタイプと準備時間(1回分)の関係

さらに、同時双方向型とオンデマンド型それぞれの特徴(形態・構成)を見てみると、同時双方向型では、約8割が「主にスライドなどの資料共有で授業を行っており、半数は「授業時間のほとんどを講義にあてている」伝達型の講義となっていました。一方、オンデマンド型では約5割近くが、文字による学習への指示と講義資料を配信メディアとして利用しており、8割が本学で提供されているLMSの「PandA」のリソースツールにより配信していることが分かりました。

＜課題の頻度と課題の採点とフィードバック＞

オンライン授業において、学生の学習状況や習熟度の把握し評価する上で、課題の提出をどれくらい行い、学生にフィードバックしているかについて聴きました(図2の項目13)。回答者全体では、約4割強の教員が「概ね毎週」課題を課し、提出させていました。提出メディアとしては「pdfやWordファイルなどの文書ファイル」が8割近くでしたが、「紙に書かせて電子化し、提出」という方法も約3割でした。授業タイプ別に見てみると、混合型は高頻度、同時双方向型は低頻度で課題を課していました(図5)。

また、課題の採点とフィードバックについては、全体では約6割の教員は、採点し、何らかの形でフィードバックしているようでした。さらに授業タイプ別に見てみると、混合型は積極的に採点・フィードバックしているようでしたが、同時双方向型は、「フィードバックは行っていない」と応えた教員は約2割でもっとも多かったです。



図5 課題についての回答(オンライン授業のタイプ別)(左:頻度(N=1,120)、右:採点とフィードバック(N=1,059))

＜学習効果の実感＞

オンライン授業を行ってみて、実施前に想定していたものと比べて、学生の学習効果をどの程度実感しているかを4段階で問いました(図2の項目16)。「効果を実感している」、「ある程度効果を実感している」を併せると、8割強の教員が学習効果を実感しているという結果になりました。また授業タイプ別で見ると、混合型、同時双方向型、オンデマンド型(動画教材)、オンデマンド型(テキスト教材)という順に、効果を実感している割合が高いという結果になりましたが、いずれも7割は越えていました。

オンライン授業の効果としては、「オンライン授業で良かったこと」について、選択肢と自由記述で聴いています。教員にとってという観点では、「場所を選ばずに授業できる」という選択肢への回答がもっとも多く6割強で、学生にとっては何が利点かという観点でも同様の結果となり、こちらは7割強でした。自由記述では、教員からの観点では、「例年以上に出席率が高い」、「講義内容に対する質問が対面のときよりも多かった」、「勤務先からは遠路大学に通っているため利便はよくなる」という回答が見られました。さらに学生からの観点では、「留学生対象のクラスでは、海外からの参加が可能」、「学生によっては対面の場合よりチャットの方が気軽に質問できることもあるように感じる」、「個別に、より丁寧な指導が受けられる」などが挙げられていました。

一方、「オンライン授業で困っていること」については、選択肢での回答では「授業準備に時間が取られる」が5割、「授業資料・課題をオンライン授業用に新しくする必要がある」が約5割弱とともっとも多く、「学生とのコミュニケーションがとれない」も4割強で、授業準備や学生との双方向性に課題を感じている教員が多いようでした。逆に、各種オンライン授業用のICTツールなどの使い方については1割に至らず、課題と感じている教員は少なかったようです。自由記述では、「機材導入にかなりの公費を割いている」、「非常勤や共同研究室の研究者は授業配信側のインフラが整わない」、「大人数講義だと学生からの意見を聞くのは非常にストレスでつらかった。ネット経由だとストレートに荒い言葉・言説も出てくる」といった回答がありました。

＜オンライン授業についての今後の見込み＞

前期終了時点での今後(2020年度後期、2021年以降)の授業の実施方法について、どのような希望を持っているかについても聴いています(図2の項目17)。「対面での授業実施に戻したい」以外、「対面での授業を中心にオンライン授業を併用したい」、「オンライン授業を中心に対面での授業を併用したい」、「オンライン授業で行いたい」の3つの選択肢を併せると、約7割弱となり3人に2人は何らかの形でオンライン授業を取り入れたいという考えであることが分かりました。授業タイプ別に見てみると、オンデマンド型(テキスト教材)では4割近くが「対面での授業に戻したい」と考えていることが分かりました。

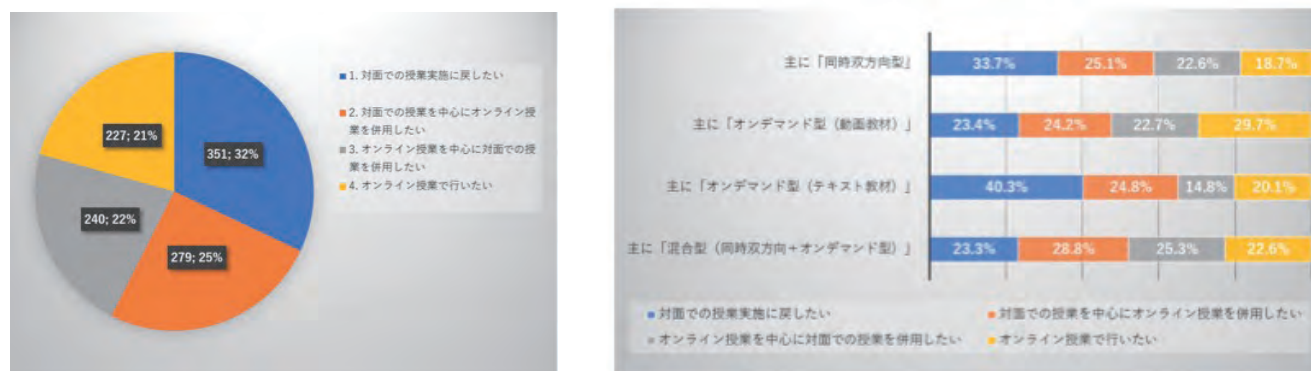


図6 今後の授業の実施方法(左:全体(N=1,097)、右:オンライン授業のタイプ別(N=1,097))

自由記述でも、「今後の授業で取り入れたいこと」を聴いていますが、カテゴリー化すると次の5つに分けられました：ハイブリッド型、一部対面の導入、反転学習1(オンデマンド+同時双方向型)、反転学習2(オンデマンド+対面)、同時双方向型、オンデマンド型の維持・向上。

さらに、「オンライン授業への要望・意見」も自由記述で聴いていますが、たくさんのコメントが寄せられました。なかでも学生関係では「学生のからの授業に対する意見を分析して、教員にフィードバックしてほしい」、「留学生へのケアを増やしてほしい」という要望や「学生の参加率を上げる対策が必要である」、「特に新入生は同級生同士の講義を通じての交流が希薄になっているのが心配である」、「個々の学生に対するケアやフィードバックが行いやすい」という意見が挙がっていました。また授業関係では、「試験実施へのサポートがほしい」、「1年は教員の(オンライン授業への)挑戦を温かく見守ってほしい」という要望や、「手で書く機会が対面よりも少ない」、「恒常的なオンライン授業実施となれば、根本的な授業のあり方を見直す必要がある」等の意見が挙げられていました。

5. 教員調査

調査結果の報告・公開と今後の展開

これらの調査結果については、実施後すぐ集計・分析が行われ、2020年9月11日に本学の全学教育シンポジウムで、2020年9月25日に国立情報学研究所主催の「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」第17回で、結果概要の報告が行われました。また、発表された資料と調査全項目についての集計は報告書として、高等教育研究開発推進センターのTeaching Online@京大サイトに公開しました。報告・公開された結果の詳細は、Teaching Online@京大サイトの「2020年度前期 オンライン授業に関するアンケート調査の結果報告」(以下)をご覧ください。

https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/report_survey_onlineteaching_SS2020.php

先にも述べました通り、前期は急激なオンライン授業への転換に際して、本学の授業担当教員がどのように対応してきたのか、どのようなことを感じているのかという実態を把握するために、調査が行われました。そこからは、多くの教員の授業への努力と意思を知ることができました。これらは全体の結果として授業担当教員へ報告・公開することができました。今後も、部局毎の違いやより詳細な分析を行っていくことや、個別の教員への情報の聴取などを継続的に行っていきたいと考えています。

また、現在進行形で後期もオンライン授業が行われており、後期では対面授業との両立という「ハイブリッド型(いずれかのオンライン授業＋対面)」への移行する授業も増えてきています。特に「ハイフレックス型(同時双方向型＋対面)」は、教員の実施負担も大きく、フルオンライン授業とは異なる難しさをはらんでいます。そこで、後期授業の実態や、さらにアフターコロナに向けてのオンライン授業のあり方への意見・要望を捉えることも必要と考え、後期も教員調査を実施する予定です(2021年1月時点)。実施された後は、前期同様、結果を分析し報告・公開していきたいと考えています。

6. 京都大学のFDウェブサイト

FD 研究検討委員会が、教育制度委員会の下に置かれた FD 専門委員会に改組されたことをふまえて、2020 年 9 月、ウェブサイトをリニューアルしました。これまでのサイト名は「FD 研究検討委員会」でしたが、新しいサイトは委員会の所掌範囲を超えて幅広く本学の FD 活動をカバーできるよう、本冊子の名前と同じ「京都大学の FD」としました (<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>)。FD 研究検討委員会時代の古いコンテンツはアーカイブ化し、現在走っている FD 活動やイベント、報告書・リソースなどを見やすくしました。これまでの『全学教育シンポジウムの報告書』などもこちらからダ

ウンロードできます。

今後も本学や各部署、さらには個々の教員のみなさまの教育向上・改善の取り組みを促し、相互交流を図ることができるよう、関連情報を発信したり、本学の特色ある取り組み（カリキュラムや授業など）を「教員インタビュー」によって掘り起こしたりすることで、できるだけ FD 活動に役立つ情報を提供していきたいと考えています。ぜひ当ウェブサイトを訪ねていただき、ご要望や情報提供などいただけると幸いです。

京都大学のFD活動は、高等教育研究開発推進センターの支援の下、全学や各部署、さらには個々の教員の教育向上・改善の取り組みを促し相互交流を図ることをめざして、教育制度委員会FD専門委員会を中心に進められています。

教育担当理事挨拶

- 教育担当理事挨拶

FD専門委員会

- 概要
- 内規
- 委員

京都大学のFD活動

- オンライン授業・ハイブリッド型授業サポート
- 全学レベルのFD
- 全学教育シンポジウム
- 各部署のFD
- 新任教員教育セミナー
- プレFDの取り組み
- ICTの教育的利用

報告書・リソース

- 『京都大学のFD』（毎年刊行）
- 『全学教育シンポジウム報告書』（毎年刊行）
- 『京都大学の教育サポートリソース』

FD研究検討委員会

- 概要
- 活動日誌（2006-18年度）

第23回京都大学全学教育シンポジウム報告書「2040年に向けた京都大学の教育のグランドデザイン」発行のお知らせ

第23回京都大学全学教育シンポジウム報告書「2040年に向けた京都大学の教育のグランドデザイン」が発行されました。PDFファイルにてダウンロードできます。
(📎 ダウンロード：PDF 16.6MB)

新着情報

2020.10.26	→ 「新任教員教育セミナー2020」の事後アンケート結果をまとめました。事後アンケート結果は📎 こちら 。
2020.10.14	→ 「第24回全学教育シンポジウム『京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する』」の事後アンケート結果をまとめました。事後アンケート結果は📎 こちら 。
2020.10.14	→ 「大学院生のための教育実践講座2020」の事後アンケート結果をまとめました。事後アンケート結果は📎 こちら 。
2020.9.24	→ 「新任教員教育セミナー2020」を開催しました。プログラムは📎 こちら 。
2020.9.11	→ 「第24回全学教育シンポジウム『京都大学の教育におけるニューノーマルを展望する』」を開催しました。プログラムは📎 こちら 。
2020.8.24	→ 「大学院生のための教育実践講座2020」を開催しました。プログラムは📎 こちら 。

過去の更新情報は📎 [こちら](#)

全学教育シンポジウム

新任教員教育セミナー

大学院生のための教育実践講座

文学研究科 連続公開セミナー・検討会

図1 リニューアル後のトップページ
(<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>)



III. 各部署のFD

I. 大嶋 正裕 副理事・工学研究科長インタビュー

各部署の教育やFDについて紹介するために、部局長へのインタビュー記事を掲載していきます。第2回は、大嶋正裕副理事・工学研究科長にご登場いただきました。より詳しいインタビュー記事は高等教育研究開発推進センターウェブサイト(<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>)に掲載しています。

工学部・研究科における課題：応用力と英語力の強化

——本学で最大部署である工学部・工学研究科長として、教育において尽力されてきたことや、工学部・工学研究科ならではの課題とはどんなことでしょうか？

各学科や専攻で、授業を工夫されているので、個別の授業科目については、とやかく言うことはしません。一方で、複数の学科・専攻で共通の課題は何か、横断的な課題は何かを考えるのが、工学部長・工学研究科長の責務なのだろうと思います。

工学部・研究科の第一の課題は、博士後期課程修了者の応用力の強化です。この課題に対しては、他専攻の科目を横断的に修得して修了できる「融合工学コース」を大学院に十数年前に作りました。第二の課題は、英語力や海外留学に関するものです。桂キャンパスに移転してから他分野の学問や英語の学習に学生が時間を割く余裕がないこと、英語力が今一つ伸びていないと言われていること、学部の授業カリキュラムの階層性と提供の密度から、学部生の中長期留学が他部署より極端に少ないことが問題だと考えています。どちらの課題も、いまだ完全な解決には至っていません。

Friends of Kyoto University (仮称) による支援

学生の英語力を強化するための方策として、民間の語学学校の講師に大学へ来てもらう英語クラスを有償で提供するQUESTという制度を運用してきました。あわせて、実践的な英語科目の必要性から、附属工学基盤教育研究センターが主体となって、英語の授業を提供してもらっています。学生の海外留学や経験を積ませる機会を増加する施策については、少し明るいニュースがあります。理事の久能(祐子)先生の呼びかけにより、アメリカで、Friends of Kyoto University(仮称)という非営利組織が設立されました。米国内で集めた寄付をそちらで運用し、運用益を改めて本学に寄付くださるという計画を進めていただいています。幸いにして、寄付文化のあるアメリカに在住する篤志家の方が工学での教育・研究支援に向けて多額の寄付をしてくださることになり、その運用益で、アメリカに限定されますが、学生を短期・中長期に派遣する支援ができるようになります。学部生に対しては、夏休みや2年生後半以降に数週間の研究・研修活動、語学留学を含めて必要経費を支援していくこと、博士後期課程の学生や若手の教員には、1・2年間の滞在費を支援できるような制度を計画しています。

——コロナ禍やそれへの対応を通じて、工学部の教育や教員にどんな変化がありましたか？ 今後の教育・授業についてどんな構想、見通しを持っておられますか？

明らかにこの1年で、先生方のPandAを使ったLMSシステムの活用技量が上がり、授業の中身を見直したことで、授業の質も上がっ

たと思います。今後は、留学生・日本人学生のためにもICTを使った授業を、さらに進化させていければと思っています。例えば、Zoomの授業に自動で日本語・英語字幕をつけられる自動音声認識・同時翻訳授業支援システムの普及や活用、動画による実験の前説明はもとよりVRやARなどを使った実験の構築などは、工学部らしい授業の工夫かなと思っていますので、ぜひ進めてもらいたいと思っています。



学生が気軽に立ち寄れる保健室

——今年度前期の学生調査では、「1年生が上級生に比べてより多く不安や心身の不調を感じている」という結果が出ています。学生の学びと成長を支えていくにはどんなことが必要でしょうか。

友達同士、教員との顔合わせの機会を作るために学科単位で少人数のオリエンテーションを実施するようお願いしました。他にもメンター制度や保健室の設置など学生が相談しやすい環境を整えています。保健室は吉田に2室、桂に1室開設しました。学生は自分に合う養護教諭がいる保健室に行って相談できます。「保健室」という名前にしたのは、学生が入りやすいネーミングで敷居をぐっと低くして、高校生の頃、ちょっと立ち寄ったような気軽な感覚でいつでも相談できるようにすることが大事だと考えたからです。教員側では、オリエンテーションや授業で保健室に関する周知や理解活動に努めながら、保健室と連携しています。

——最後に、この1年の本学および工学部・工学研究科のFDについてどう見ておられますか。

研究科長の3年間、私がやったことの一つに、年に1回のFDの機会に15分ですが、話す時間をとってもらい、学部教育のあり方やKyoto iUPをどう見るかなどのお話を先生方にして、ある程度のVisionをお示ししたことがあります。Zoom授業やオンライン試験に関しては、先生方で、かなり綿密に情報交換をされて、熱心に取り組んで来られました。ある意味、この1年は、10年分のFDに匹敵するかもしれませんね。年に1回のFDではなくて、日頃からのFD活動が本来あるべき姿なのだと思います。

(インタビュー：高等教育研究開発推進センター)

*本インタビューの拡大版はこちら：
<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/news/news-1335/>



2. 岡邊 健 教育学研究科准教授（学術情報整備委員長／自己点検・評価委員会委員）インタビュー

教育学研究科・教育学部はコロナ禍の対応について、新型コロナウイルス対応ワーキンググループを立ち上げ、オンライン授業や新入生の支援など、組織的に取り組んできました。さまざまな取り組みの中から特にオンライン授業支援について、岡邊先生に学術情報整備委員長としての経験をお話いただきました。

危機感の共有と支援体制の構築

——授業がオンラインに切り替わることが想定され始めたころに、教育学研究科は、どのような体制で何に対応していくことを検討されたのでしょうか？

まず体制としては、3月13日に新型コロナウイルス対応ワーキンググループ（以下、WG）が立ち上げられました。WGのメンバーには研究科長、副研究科長、教務、学生の各委員長、教育制度委員長、事務長、事務方が入り、第2回目より学術情報整備委員長である私と研究科内の情報担当助教が加わりました。

3月は本当に慌ただしい日々が続きました。3月初頭ごろから大学の授業がオンラインになる可能性が浮上する中、全学的には4月から通常通りの対面授業を実施するという方針でした。そこで、第1回WGではコロナ感染拡大予防の措置をしながら対面授業を行うための方策について話し合われました。しかし、2回目以降でオンライン授業という方法を何らかの形で取り入れる必要があるだろうということが明らかになりつつあったため、それに向けての準備を進めていくことが重要課題であることが共有されました。幸い、私自身はPandAもZoomも利用したことがあったため、オンライン授業のやり方のイメージはすぐに持つことができました。

3月の下旬にWGで意識されていたのは「いかにして、教員に危機意識を持ってもらうか」という点でした。3月26日に1回目のZoom体験会を開催し、28日には、メール通信の第1報を送信しています。PandAやZoomの学内講習会、高等教育研究開発推進センターの立ち上げた授業支援サイトTeaching Onlineなどについて案内しました。メール通信はその後も続き、現在35報まで送信しています。

——まずは危機意識を共有する、というところから始まったんですね。オンライン授業の実践にあたり、研究科の先生方が直面するであろう問題としては、どのようなものを想定され、どのような対応を考えられたのでしょうか？

そうですね。当時、オンライン授業を行うために使うと想定された二大ツールであるPandAとZoomについて、多くの先生方はあまりご存知ではない状況だと考えました。そこで、PandAとZoomの使い方を学んでもらうこと最優先事項としました。学内講習会とは別に学部内でも独自の講習会を行うこととし、また、ICT支援員を配置することにしました。ICT支援員というのはPandAのコースサイトの作成やZoomの初歩的な使い方などをサポートする大学院生のことです。支援を通じて蓄積された情報はPandAに教育学研究科の教員用サポートサイトを立ち上げ、そこに集約するようにしました。サイトは、情報担当助教の久富先生と連携して運営しています。

オンライン授業の効果

——実際にオンライン授業を実践された先生方のオンライン授業に対する評価については、どんな声がきかれていますか？

そうですね、オンライン授業でもできることが結構あるんだ、という感想を多くの先生方が感覚的に抱かれたことと思います。また、私の近くにいる学生の反応でみる限り、総じていうと学生の評価も悪くありませんでした。ただオンライン授業の教育効果については、軽々しく言えることではなく、しっかり調査しなければいけないと考えています。関連して、特に評価をどうするか、という問題については大変難しく、結論が出ないままになっています。

今後について

——今後、研究科としてオンライン授業の扱いについてはどのように検討していく予定なのでしょうか？

今回は緊急の対応だったわけですが、これを契機にして、今後の教育のあり方について考えていかなければいけないのだと思います。

今でも覚えています、3月にWGが立ち上げられた時、教育を止めちゃいけない、研究を止めちゃいけない、という問題意識がかなり強く共有されていました。その意識は今も続いていて、研究科の構成員全体に共有されていると思います。解決することが難しい問題は山積していますが、この気持ちを持って対応を模索していくことが大切だと考えています。



（インタビュー：高等教育研究開発推進センター）

＊本インタビューの拡大版はこちら：
<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/news/news-1349/>



III. 各部署のFD

3. 喜多 千草 文学研究科教授

(情報環境機構教育システム運用委員会委員／デジタルを活用した大学・高専教育高度化プラン(Plus DX) タスクフォース委員) インタビュー

2020年度、オンライン授業化の波は文学部・文学研究科にも及びました。PCを使用せずに授業されていた先生も多いなかで、授業開講支援を先導したのが、その前年度に本学に戻ってこられたばかりの喜多千草先生です。同学部・研究科の支援状況を伺いました。

——コロナ禍下、文学部・文学研究科ではどのような授業開講支援を行ったのですか？

本学部・研究科では、2020年3月17日に設置した新学期の授業対策を検討する委員会を中心に、全学委員会と連携しつつ、オンライン授業支援を進めてきました。オンラインで質問受付、情報提供・共有をするとともに、オフラインでは、同年4月に新設した「オンライン開講サポート窓口」でのサポートを通じて、授業の開講支援を行っています。私は新学期の授業対策委員会メンバー、PandAの学部担当者として、体制づくりに携わってきました。

——オンラインでの質問受付と情報提供・共有は、具体的にどのような行なったのでしょうか？

オンライン授業ではPandAの利用が欠かせません。しかし本学部・研究科では2019年度後期にPandAを導入したばかりであり、まずはその使い方に関する情報提供やサイト立ち上げ支援から行う必要がありました。そこでまず、メール問い合わせ窓口を立ち上げ、メールベースで個別に質問対応を行いました。次に、そこで集まった典型的な質問とそれに対する回答をFAQとして提供するとともに、新たな質問を共有する場として、「PandAのツボ」というプロジェクトサイトをPandA上に設けました。

——一番大変だった時期はいつでしたか？

4月、5月です。本学部・研究科では、他学部・研究科と比べ非常勤講師の数が多く、PandAへの登録作業の支援に追われました。常勤の方からもPandAの利用方法などに関する質問が多く寄せられ、前期は質問の対応に追われました。メールは書き言葉ではなく話し言葉のメディアだと割り切り、スピード重視でメールのお返事をしていましたね。先生方が徐々にオンライン授業に慣れてきたほか、「PandAのツボ」のコンテンツが充実し、困った時にそれを参照すれば解決できるケースも増え、現在ではだいぶ落ち着いてきました。

——「オンライン開講サポート窓口」について、詳しくお聞かせ頂けますか。

同窓口は、本学部・研究科の常勤・非常勤の教員全員を対象に、オンライン授業実施に関わる質問の受け付けやオンライン授業実施のための器具の貸し出しを行う支援窓口です。現在閉鎖されている文学部学生ラウンジのスペースを使用し、今回特別に雇用した技術補佐員2名が対応にあたっています。ふたりには、実際にPandAのコースサイトにインストラクター権限で参加したりしながら、必要となる知識・経験を学んだ上で、業務を行ってもらっています。

——後期からは、iPadを活用したハイブリッド型授業を展開されていると耳にしました。

本学部・研究科の先生方のオンライン授業への対応の様子から、それ以前は授業にPCを使っていなかった先生の存在が見えてきました。そこで、授業のスタイルを変えずにハイブリッド型授業を行う方法がないかと考え、試行錯誤の結果、iPadにたどり着きました。小規模の教室であれば、iPadを設置するだけでオンラインでの音声・映像の中継ができ、普段通りの授業を進めることが可能です。こちらでもオンライン開講サポート窓口で支援しており、iPadの貸し出しや設定の補助、利用方法の相談にあたっています。



(左) 喜多千草先生



(右) オンライン開講サポート窓口での支援の様子

——お話を聞いていると、喜多先生のご活躍が目立ちますが、全てお一人でやられているのですか？

決してそんなことはありません。立ち上げの段階では私が主体となる場面もあったのですが、すぐに他の教職員の方々の協力が得られ、協働して進めています。「PandAのツボ」には情報委員会の先生、有志の先生が早い段階から協力してくださり、今やコンテンツでいっぱいになりました。メール問い合わせ窓口においても、情報委員会の先生方が献身的に質問対応にあたってくださいました。サポート窓口も技術補佐員の2人がよくやってくれています。私は単にお手伝いをしているだけ。みんなで助け合いながらオンライン授業への対応を進めています。

——最後に、文学部・文学研究科でオンライン授業対応が円滑に進んでいる要因は何かあるとお考えですか？

お互いに助け合ってやっていくという互助の姿勢がよかったのだと思います。トップダウンで進めるというのは本学部・研究科の風土に合いません。そもそも皆の協力なくして進むものではありませんよね。互助の姿勢により、現場の教職員の方々と密に連携をとりながら、先手先手で対策を進めることができていていると感じています。

(インタビュー：高等教育研究開発推進センター)

*本インタビューの拡大版はこちら：
<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/topics/kita01.php>



IV. 新任教員教育セミナー

2020年9月24日、Zoomを用いたオンラインによる「京都大学 新任教員教育セミナー 2020」を開催しました。本セミナーは、本学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。当日の参加者は当日配布資料の名簿に掲載された人数が191名、Zoom上では一番多いときで、170名程度でした。セミナーでは「今の時代にふさわしい京都大学らしい教育」とはどのよ

うなものかを探求することを目的とし、日本の大学教育の動向や本学の教育改革について知り、実際に直面している教育に関する問題や学生指導上に関わる課題などについて共有したりする場所になるようプログラムを構成しています。今年度は、コロナ禍における教育のあり方について考えるためのグループディスカッションセッションを特別にもうけました(表1)。

表1 2020年度京都大学新任教員教育セミナープログラム

13:00～	開会式 (司会: 山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授) 趣旨説明 松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授
13:05～	セッション1 オープニングレクチャー 「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 北野 正雄 理事・副学長(教育・情報・評価担当)
13:30～	セッション2 グループディスカッション 「コロナ危機の中で京都大学の教育をどう進めるかー課題や実践知を共有するー」 ファシリテーター 山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授
14:15～	休憩
14:30～	セッション3 グループ別セッション(参加型セッション)(詳細は表2参照) テーマ①「留学生とどう向き合うか」 テーマ②「研究室運営を考える」 テーマ③「困難を抱えた学生に向き合うには」 テーマ④「アクティブラーニング型授業をやってみよう」 テーマ⑤「これからのオンライン授業を考える」

全体会では、まずセッション1として、北野正雄教育担当理事・副学長(当時)より「現在の大学教育の動向と本学の教育改革」と題したオープニングレクチャーがありました。教育改革の方向性に大きな変化はないものの、コロナ禍においてこれまで当たり前でできていた教育活動ができなくなり、あらためて授業やキャンパスの役割、本学の目指すべき教育の姿が問われることになったとの指摘がありました。セッション2は、前期に実施したオンライン授業に関する教員調査の結果を参考に、コロナ危機の中で本学の教育をどう進めるか、という点について考えるグループディスカッションでした。教員調査からは、オンライン授業に対する一定の手応えを

感じる結果が見えつつも、学生とコミュニケーションをとることの難しさや評価手法の問題、学生間の繋がりを作ることの難しさやオンライン授業準備の過剰負担など、様々な課題が感じられていることが報告されました。セッション3は、参加型セッションとして、用意した4つのテーマごとに分かれてのワークショップがありました(表2)。例年、最後には再度全体で集まりジグソー形式によるインテグレーションセッションが行われていましたが、今年度はセッション3でテーマごとに異なるZoomミーティングルームを利用する形式としたため、それぞれのセッションが終わった段階で解散となりました。

IV. 新任教員教育セミナー

表2 セッション3 参加型セッションの各テーマと内容

【テーマ】	留学生とどう向き合うか
【担当講師】	理学研究科附属サイエンス連携探索センター(SACRA)国際戦略部門講師 鈴木 あるの
【主な内容】	研究室や授業のクラス内に留学生を見かけることが普通になりました。異なる語学能力や文化・宗教・政治的背景をもつ国々の学生が共に気持ちよく学び、多様性を建設的な議論へと結びつけるために、教員にできることは何でしょうか。このセッションでは、マナーとして最低限知っておきたい海外事情や異文化の考え方、世界各国の様々な教育制度の概要などを、特に本学で起こりがちな問題に絡めながら紹介します。さらにディスカッション形式で皆さんのご経験も共有していただき、より多くの疑問を解決していければと思っています。
【ファシリテーター】	佐藤准教授 SADEHVANDI研究員
【テーマ】	研究室運営を考える
【担当講師】	学際融合教育研究推進センター准教授 宮野 公樹
【主な内容】	教員にとっての研究推進の場、そして人材育成の場である研究室。研究室を研究と教育の原動力として機能させるにはどうしたらいいでしょうか。PI(Principal Investigator)各々のやり方があるとは言え、この機会に一度考えておくのも大事かと思えます。いくつかの事例と調査結果を紹介いたします。
【ファシリテーター】	岡本特定講師
【テーマ】	困難を抱えた学生に向き合うには
【担当講師】	学生総合支援センターカウンセリングルーム講師 和田 竜太
【主な内容】	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。
【ファシリテーター】	勝間特定助教
【テーマ】	アクティブラーニング型授業をやってみよう
【担当講師】	薬学研究科講師 津田 真弘 高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代
【主な内容】	2018年度から薬学部では、アクティブラーニングを取り入れた授業(講義を聴くだけでなく、話す、書く、発表するなど学生側の能動的な参加を含む授業)に取り組んでいます。その中で、学生たちは能動的に参加するだけでなく、協働で深く学ぶ姿勢を身につけてきています。このセミナーでは、その授業で使っているさまざまなやり方、技法を実際に体験していただきながら紹介します。今年度はコロナの影響でオンラインでの実施となりましたが、いろいろな工夫で継続しています。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、この機会にしっかり学びたいという方まで参加できます。
【ファシリテーター】	原特定研究員
【テーマ】	これからのオンライン授業を考える
【担当講師】	高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈/酒井 博之 情報環境機構教授 梶田 将司
【主な内容】	授業におけるICT活用を余儀なくされたこの数か月、初めてPandAを使った、という先生も多いのではないのでしょうか。コロナ禍が過ぎ去ったあとも、対面授業に加えて、ICTを活用することで、授業準備を効率化したり、教育効果をあげたりすることができます。また、京都大学が取り組んできたOCW、MOOC、KoALA(京大のSPOC)を通して、先生の授業を学外に発信したり学内の授業で活用することもできます。本セッションでは、学内のオンライン授業のグッドプラクティスやICT活用事例を紹介し、これからのオンライン授業について考えたいと思います。
【ファシリテーター】	鈴木特定研究員

参加者の事後アンケート(80名回答、教授5名、准教授17名、講師13名、助教45名)より、総合評価は76名の方が有意義であったと回答と高い評価が得られました。自由記述からは、今後、取り上げるといであらうテーマとしては、「研究教育の国際化」「課題の与え方」「教育現場におけるハラスメント」「研究指導」といった

様々なものが提案されました。セミナーの良かった点としては、コロナ禍での新規採用で、同僚との交流もままならない状況であったため、こういった機会があつてよかったとの声をお寄せいただきました。

引き続き、よりよいプログラムにしていきたいと思っています。

V. プレFDの取り組み

I. 大学院生のための教育実践講座

本講座は、高等教育研究開発推進センターが主催し、将来、大学教育に携わることを希望する本学の大学院生(OD・PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。2020年度は、8月24日に開催されました。16回目となる今回は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、オンライン(Zoom)での開催となりました。

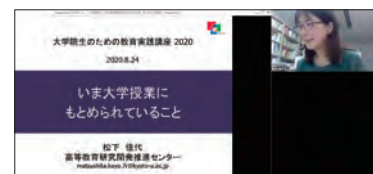
当日は、さまざまな専門分野から59名が受講しました。参加者数は、前年度から20名も増えました。講座内では、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに4つのテーマに分かれて大学教育実践について検討するためのグループワーク、本学大学院を修了した若手研究者による、授業実践に関する講義といった多様なプログラムをもとに、受講生それぞれが「大学でどう教えるか」という問いに対して考えを深め、また、参加者同士で意見交換しました。全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する満足度を5件法(1: まったく満足していない～ 5: 非常に満足している)で評価してもらったところ、満足度の平均は4.8と大変高い値でした。また今年度も、議論のまとめと報告、全体での質疑応答を実施しました。やや時間不足の感はありましたが、その評価も4.4と、同じく好評でした。参加前後における大学教育に対する問題意識の変化を聞く質問(自由記述)では、「これまで大学教育についてあまり深く考えたことがなかったが、講座を通して様々な課題があることを知り、『自分ならこのように解決したい』というビジョンをもてるようになった」「研究のことで日々頭が一杯な一方で、大学教員として働くことも考えなければいけないと思っているなかで、本講座はその橋渡しとしてとても有意義でした」「聞き手目線で何を持って帰ることのできる授業にするかを、今後意識していきたいと思った」といった回答がありました。受講者それぞれの視点から、未来のファカルティの一員として、大学教育に対する考えを深める良い機会となったようです。

大学院生のための教育実践講座: <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>
<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/kouza2020.php>

2020年度のプログラム

10:00～	開会式	挨拶:北野 正雄(教育・情報・評価担当理事・副学長) 趣旨とプログラムの説明:鈴木 健雄(高等教育研究開発推進センター特定研究員)
10:20～	セッション1	ミニ講義1「いま大学にもとめられていること」: 松下 佳代(高等教育研究開発推進センター教授)
10:40～	セッション2	グループ討論1:4つの部会に分かれて議論 ①「アクティブラーニング」(岡本雅子)、②「ICT活用」(田口真奈)、 ③「多様性」(勝間理沙)、④「授業デザイン」(長岡徹郎)
12:00～	休憩	Zoomはオフにし、各自でランチ
13:00～	セッション3	ミニ講義2「学生が学びたくなる授業」: 斎藤 有吾(新潟大学准教授)
13:30～	セッション4	グループ討論2: 上記の4つの部会に分かれて、さらに深く議論
15:00～	セッション5	グループ討論3: 部会ごとにグループ討論の整理
16:30～	休憩	
16:40～	セッション6	発表と全体討論:各部会から1グループずつ発表。活発な議論を展開。
17:20～	閉会式	挨拶・修了証授与:飯吉 透(高等教育研究開発推進センター長・教授)



V. プレFDの取り組み

2. 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」

本学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム（研究科横断型教育プログラム）を2009年度から実施してきました。2018年度からは当該プログラムを改編して、研究科が開講する科目の中で、他研究科学士の履修にも配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、多数の研究科の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目をまとめ、「大学院横断教育科目群」として履修できるように整備されました。

その中の「キャリア形成系」（従来は「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」）の科目として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」（後期集中講義）を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を実践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン（到達目標・評価方法）を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2020年度は2月9日・10日・12日の3日間で実施されました。今年度はコロナ禍において、フルオンライン授業だったため、教員4名TA3名で授業を行いました。受講生は15名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました（文学研究科1名、教育学研究科1名、理学研究科1名、医学研究科2名、工学研究科1名、農学研究科2名、人間環境研究科3名、エネルギー科学研究科1名、地球環境学1名、経営管理大学院2名）。オンライン授業でのコミュニケーションとして、Miroなどのオンラインアプリを使用したり、Zoomのブレイクアウトルームを使用したりして、さまざまな形でディスカッションを行いました。そして、専門分野の異なるチーム（4チーム）でコース、授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート（15名中15名から回答、回答率100%）では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた（平均3.9）」、「内容に関する興味を高めるための配慮があった（4.0）」、「講義に参加しているという感覚がもてた（4.0）」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった（4.0）」（いずれも4段階評価）など高い評価が得られました。自由記述からは、「普段の所属学部の授業とは違い、大学院共通科目の良さが活かされた面白い授業だった」、「文系の方と触れ合うこともなかったので、良い刺激を得られた」、「3日間と言う短いプログラムにもかかわらずとても内容が濃い授業で、非常に有意義な時間が過ごせた」、「自分の専門分野であればどうなるかという点について、さらに自分で深く考えて、実際の授業コマ担当につなげていきたいと思う」、「この授業で、さまざまな分野の人と出会い、社会人になってからもう一度学校に戻ってきた人が多く、みんなとの話し合いやディスカッションを通じて沢山の知識や知恵をもらい、自分の「経験値」が上

がった気がする。集中講義は疲れを感じる事が多く、早く終わりたいと思うが、この授業では全然感じなかった」、「グループワークがあまり得意ではないのですが、自分なりに楽しめた」といった様々な声が聞かれました。



3. 文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科のOD/PDを対象とするもので、2009年度から実施されています。各授業のあとに担当講師と他の講師、コーディネーターを交えた検討会を実施することと、前期開始前に事前研修会を、年度末に事後研修会をそれぞれ実施することが特徴です。所定の条件を満たした参加者には、本学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約170名が修了証を得ています。

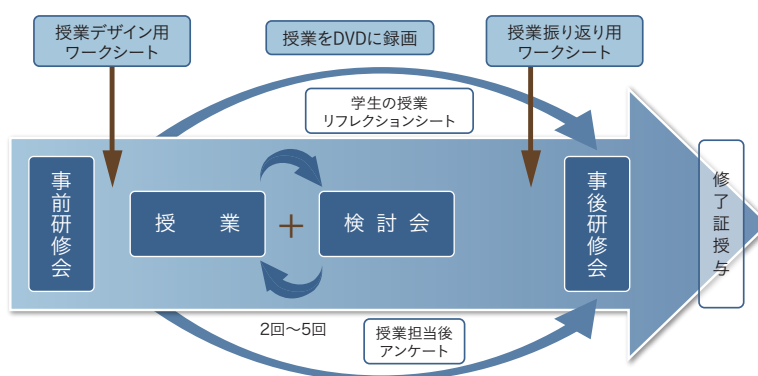
2020年度は、文学研究科よりコーディネーター 5名、教務補佐員3名、講師17名が参加し、高等教育研究開発推進センターより4名がこれをバックアップする形で、哲学基礎文化学系と行動・環境文化学系、基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

同年度は授業をオンライン化したこともあり、高等教育研究開発推進センターが主導で実施する事前研修会を後期にも実施しました。オンライン化の影響か、各授業の参観者は、例年より多かったように思います。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、以下のHPをご覧ください。

●文学研究科プレFDプロジェクト

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

2020年度文学研究科プレFDプロジェクト実施体制

田中 和子：文学研究科教授／統括コーディネーター 兼 行動・環境文化学系コーディネーター

児玉 聡：文学研究科准教授／哲学基礎文化学系コーディネーター

早瀬 篤：文学研究科准教授／哲学基礎文化学系コーディネーター

伊藤 和行：文学研究科教授／基礎現代文化学系コーディネーター

喜多 千草：文学研究科教授／基礎現代文化学系コーディネーター

小林 敬：哲学基礎文化学系教務補佐員

長岡 徹郎：行動・環境文化学系教務補佐員

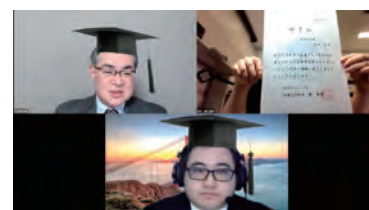
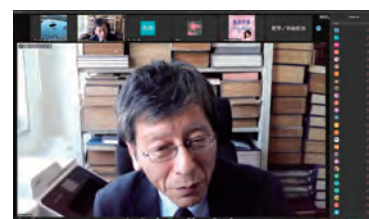
朴 美暎：基礎現代文化学系教務補佐員

飯吉 透：高等教育研究開発推進センター長・教授

松下 佳代：高等教育研究開発推進センター教授

田口 真奈：高等教育研究開発推進センター准教授

鈴木 健雄：高等教育研究開発推進センター特定研究員



V. プレFDの取り組み

2020 年度のプレ FD を振り返って

統括コーディネーター（兼 行動・環境文化学系コーディネーター）から

文学部プレFDを含む2020年度の入門ゼミナールは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、年度当初、約1か月にわたる授業休止のあと、オンライン授業での実施となりました。対面授業のつもりで準備をされていた講師の方々も、サポート役の教務補佐員の方々も、初めての経験で戸惑いが大きかったと思います。コーディネーターにとっても、授業をリアルタイムで受講する学生たちの他に、授業資料を読み、録画された動画を視聴して課題を提出する学生たちがいるという異なる受講形態に対応するなど、想像もしていませんでした。講師の方々には、講義ではなく、課題提出のための説明へと、授業構成も時間配分も変更し、伝える内容も大幅に絞っていただきました。また、今回、初めてZoomやPandAといったツールを体験された方も少なくありません。2020年度のプレFD研修を修了された方々が、この経験を踏まえて、対面授業とオンライン授業、それぞれの長所を活かしつつ、教育経験を重ね、教える力を高めてくださることを期待しています。



文学研究科教授
田中 和子

各系のコーディネーターから

●哲学基礎文化学系

COVID-19のパンデミックにより、今年度のプレFDの授業は全面的にオンライン講義で行われました。対話を重視する哲学にとっては、対面授業ができないことは大きな障壁になる可能性がありましたが、高等教育研究開発推進センターのサポートと、講師のみなさんの創意工夫により、充実した講義を行うことができました。具体的には、(1)講師が授業計画を綿密に立て、事前に予習課題をPandAで提示する、(2)普段以上に集中力を要するZoomでの講義は少し手短かに実施し、代わりに予習と復習の時間を十分に確保する、(3)終了後に学生や他の講師から講義の仕方について忌憚のないフィードバックを受ける、という形で行いました。今後も当面は対面とオンラインのハイブリッド型授業が実施されると考えられるため、講師にとっては、優れた授業をするための技法を身につけるまたとない機会となったのではないかと思います。受講生が若干少ないのが残念でしたが、みな若い講師たちの学問への情熱を受け取ったことと思われまふ。プレFDに参加した講師たちと学生たちの今後を楽しみにしています。



文学研究科准教授
児玉 聡

プレFDに関わる仕事をしたのは今回がはじめてですが、私自身も多くを学べる有益な機会だったと思います。新型コロナウイルス禍のなかで、担当講師の方々にはZoomを利用したオンライン授業を行っていただきました。講師側からは学生の反応が見えづらいのでやりにくかったと思いますが、皆さん講義中に少しも戸惑うことなく、淀みなく話をしていました。また専門の知見を50分程度に凝縮した内容は毎回聞き応えがありました。遠隔授業の特性を活かし、授業は録画されて、学生が都合のよい時間に視聴できる教材として提供されましたが、質の高いものができたと思います。惜しむらくは、まさにこのために、ライブで参加する学生がごく少数で、ほとんど双方向的な授業にならなかったことです。個人的には、若い講師の方々が遠隔講義で双方向性を出すための機能やウェブサイトなどをどのように利用するのか見てみたかった気がします。今後、遠隔授業が継続的に行われるのか不明ですが、今回参加された講師の皆さんなら対面でも質の高い授業をできると信じますし、今後の活躍に期待したいと思います。



文学研究科准教授
早瀬 篤

●基礎現代文化学系

2020年度の基礎現代文化学系のプレFDは、科学史の伊藤先生とメディア文化学の喜多でコーディネーターを担当しました。系ゼミナールは前期・後期とも開講しましたが、後期はすでにプレFDを終えた講師ばかりとなったため、プレFDは前期のみとなりました。教務補佐員のバク・ミギョンさんは、後期の非常勤講師でもあり、これまでの経験を十分に生かしてプレFDの準備・実施・まとめを行ってくださいました。またこれまでの資料や手順を取りまとめいただき、今後のコーディネーターや教務補佐員が過去からの学びを生かせるようになりました。2020年度の特筆すべき点は、やはりオンライン開講という授業形態でしょう。講義を担当する非常勤講師の皆さんだけでなく、コーディネーターも教務補佐員も初めての経験となるオンライン・リアルタイム講義でしたので、全員が知恵を出し合っのプレFDとなりました。配布資料の著作権処理、講義のわかりやすさと通信量の妥協点など、定まった方法論がないなかでの模索は、全員にとっての生きたFDだったと思います。



文学研究科教授
喜多 千草

4. 大学コンソーシアム京都との連携による単位互換リレー講義

本プログラムは、文学研究科ブレFDプロジェクト(pp. 25-26)修了後の発展的プログラムとして、文学研究科が大学コンソーシアム京都との連携のもと提供するものです。前身のプログラムが2015年度に開講されて以来、6年間に亘って開講されてきました。開講にあたっては高等教育研究開発推進センターが支援を行っています。本学の学生を含む、大学コンソーシアム加盟校の学生を対象とした、リレー講義形式の単位互換科目です。本年度は、7大学から35名が受講しました。

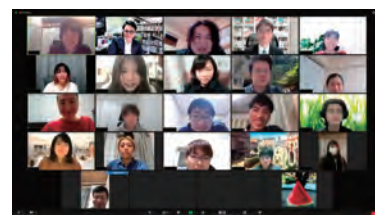
本プログラムでは、参加する若手講師たちが、個々の担当授業だけでなく半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれています。そのため、プログラムは開講の前年からスタートします。そこで、各自の担当授業と全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバスを作成するとともに各授業の構想を練ります。また、授業の一週間前にはそれぞれが翌週の授業の概要を持ち寄り、全体の到達目標を見据えつつ、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合っています。

2020年度の開講テーマは「京都で学ぶ人文学：『ちゃんとした大人』って何？」でした。本年度はZoomを用いたリアルタイムでのオンライン開講となりました。コーディネーター1名のもと、社会学、歴史学、哲学といったさまざまな専門分野出身の若手講師6名が、オンラインでのアクティブラーニング型の授業を展開しました。オンライン授業もアクティブラーニングも、それぞれ初めて経験するという講師もいましたが、高等教育研究開発推進センターの教職員によるサポートを受けつつ、全員が知恵を出し合いながら授業デザインを検討・作成していきました。

受講生間のディスカッションを促すための工夫が凝らされた本授業を通じて、受講生は自立した生活・ジェンダー・死の受容・AI・極限状態における意思決定などをテーマに、多様な観点から考察することで、ものごとを複眼的に捉えることの重要性について学びました。



受講生募集用ポスター



授業の様子

●文学部単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>



2020年度の授業を振り返って

大阪府立大学非常勤講師 梅野 宏樹

(文学研究科思想文化学系宗教学専修出身／「『自分』の死を『ちゃんと』受け入れる／受け入れない」の回を担当)



私は宗教哲学の立場から2回の授業を担当させていただきました。様々な大学から集まった学生はグループワークに意欲的で、(準備・結果発表を除き)20分程度のグループワークでは時間が足りないほど積極的に意見を交わしていたことが印象的です。こうした学生の熱意に応えるため、各講師が「この授業で何をどのように学んでほしいのか」という基本を徹底的に吟味し、検討会で議論することで授業を洗練させていきました。その上で、チャットや投票などの機能を駆使した、オンラインならではのアクティブラーニング型授業が行われました。オンラインのグループワークには、講師の目が全グループに行き届きづらいという難点がありますが、本講義では多くの講師が毎回の授業を参観していたため、互いに協力してグループを見回り、学生の議論をサポートすることができました。このように、講師間の協力体制の下で授業の質を高めていくことができたのは、私にとって得がたい経験です。

京都大学高等教育研究開発推進センター特定研究員 鈴木 健雄

(文学研究科現代文化学系現代史学専修出身／「逃げるか従うか抗うか？ヒトラー政権下ドイツ人の事例とともに考える」「まとめとレポートの書き方」の回を担当)



専門領域(ドイツ現代史)を扱う授業回とまとめとレポートの書き方の回を担当しました。開講期間中は、自身の勉強を兼ねて、全15回の授業に参加し、その後の検討会にも加わりました。検討会の議論に加わることで、個々の授業デザインはもちろんのこと、コース全体のデザインの「勘所」を掴めたような気がします。

本プロジェクトではアクティブラーニングの実施が必須とされています。今年度はそれをオンラインで実施するという困難がありました。しかし、都度2時間近く及び毎回の検討会のなかで、活発な議論と知識の共有、授業内容の調整を行うことにより、オンラインながら対面と遜色のない質の高い授業を提供できたように思います。

検討会には毎回ほぼすべての講師と高等教育研究開発推進センターの教職員が参加しました。ここで得た、お互いに切磋琢磨し合える同僚との関係は、今後大学教員として生きていくなかで貴重な財産となるに違いありません。

V. プレFDの取り組み

5. TA と協働してオンライン授業を行う

対面授業とオンライン授業では、TA の役割や気をつけておく点も異なります。そこで、高等教育研究開発推進センターが主催し、4月27日、10月7日にTAを対象とした学内講習会を実施しました。また、Teaching Online@京大に「TAと協働してオンライン授業を行う」というセクションを開設し、情報を掲載しました。ここでは、講習会の概要について紹介します。

●学内講習会

4月27日 「TAとしてオンライン授業を支援する」

目的	どのようにオンライン授業の支援をするのか 授業支援のために必要なスキルは何か
プログラム	11:00-11:05 本日の講習会の進め方 山田 剛史 11:05-11:10 趣旨説明 松下 佳代 11:10-11:30 オンライン授業とは 田口 真奈 11:30-11:40 TAとして期待されること 佐藤 万知 11:40-12:00 質疑応答 酒井 博之ほか

10月7日 「TAとしてハイブリッド型/オンライン授業を支援する」

目的	ハイブリッド型授業の異なる形式を知る オンライン授業あるいはハイブリッド型授業を 支援するための基礎的な知識・スキルについて 知る
プログラム	12:00-12:15 講習会の目的と進め方 佐藤 万知 12:15-12:30 オンライン授業・ハイブリッド型授業とは 田口 真奈 12:30-12:40 TAに期待される役割 佐藤 万知 12:40-12:50 質疑応答 佐藤 万知・田口 真奈ほか

オンライン授業では、さまざまなツールを用いた学習活動が可能である一方で、事前に準備や設定が必要なことも多くあり、TAとうまく協働することが円滑な授業運営において重要となります。4月に実施した研修会では、コロナ禍の教育活動についての本学の方針を共有した上で、オンライン授業の分類として同時双方向型とオンデマンド型授業の特徴と流れを確認しました。その上で、TA制度の目的と役割を確認し、「オンライン授業運営のチェックリスト」をみながら、オンライン授業だからこそ気にしなければならないポイントをみていきました。10月の研修会では、感染症対策をしつつオンラインから対面授業への移行していく状況を踏まえ、対面と

オンラインを組み合わせるハイブリッド型授業におけるTAの役割について扱いました。ハイブリッド型授業には、ハイフレックス型（同じ授業を対面とオンラインで同時に実施）、ブレンド型（対面とオンラインを組み合わせる方法）、分散型（学生が分散して受講）の3つのタイプがあるため、それぞれにおける授業運営上のポイントを確認しました。その後、「教員&TAで実施するハイブリッド型（ハイフレックス型）授業運営のためのチェックリスト」（表1）を用いて、TAの役割についてみていきました。今後も、状況の変化に応じて、TAおよびTAと協働して授業を実践する教員向けの情報発信や講習会を企画していく予定です。

教員&TAで実施するハイブリッド型（ハイフレックス型）授業運営のためのチェックリスト 2020年10月7日版									
このチェックリストのお薦めの使い方									
1. このチェックリストを教員・TAで共有し、「教員担当」「TA担当」の欄に、主担当（実際に作業する人）なら「○」、副担当（支援・確認する人）なら「○」、この授業では不要な項目には「×」をそれぞれ書き込む。									
2. 作業が完了したら、「済」のチェック欄に「○」と書き込む。									
3. 必要に応じて項目を増やしたり、メモを書き込んだりして使ってください。									
タイミング	大項目	小項目	教員担当	済	TA担当	済	必要な情報のアクセス方法	留意点	
	教員&TAのICT環境	PCがあるかの確認 教員とTA両方について、インターネットの通信容量は無制限か？速度は十分か？						オンデマンド型であっても動画を使用する場合は要確認。	
	授業計画	実行可能な学習到達目標、評価、授業方法であるかを見直し、教員・TAで共有・適宜修正					KULASIS掲載のシラバス	必要に応じて、授業計画を書いたWordファイルなどがあると便利です。	

表1 教員&TAで実施するハイブリッド型（ハイフレックス型）授業運営のためのチェックリスト2020年10月7日版

VI. ICTの教育的利用

1. オープンコースウェア (OCW)

(1) 京都大学OCWから公開している講義コンテンツ

京都大学オープンコースウェア(OCW)は、921講義の映像や資料にアクセスすることができます(2021年1月現在)。本学のOCWは、通常の講義以外にも、国際会議や公開講座、最終講義、オープンキャンパス等の多様な教育コンテンツを国内外の人々に向けて積極的に発信しています。現在公開されている講義コンテンツは、講義が358、公開講座が404、国際会議が86、最終講義が73あります。FDに直接関わる講義映像としては新任教員教育セミナー

の映像が公開されています。

2020年度は、「教育学研究科 2020レクチャーシリーズ」をはじめ、Zoomなどのビデオ会議システムを利用した授業や、公開講義などの映像を主に公開しています。OCWから改めてオンデマンド教材として公開することにより、再利用可能な教材として発信し続けることができます(図1)。

● 京都大学オープンコースウェア: <https://ocw.kyoto-u.ac.jp>

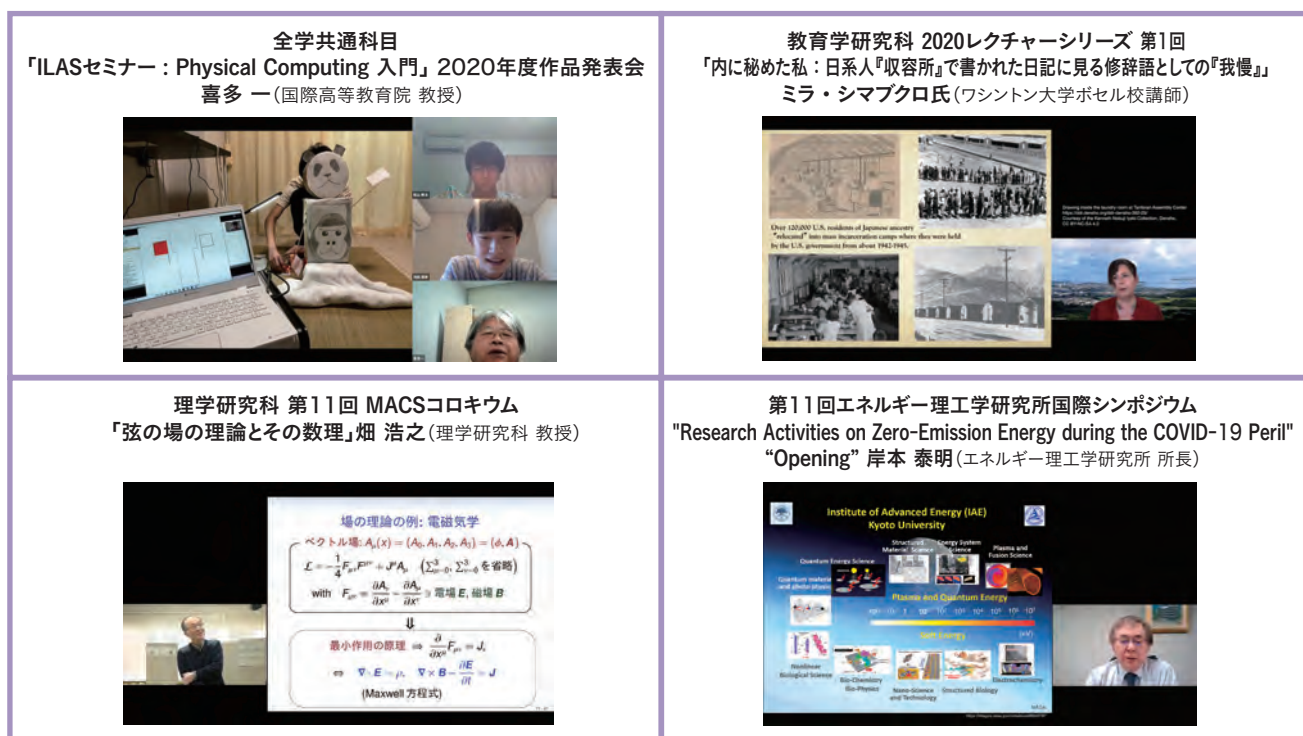


図1 これまでに公開されたOCWの例

(2) 京都大学オープンコースウェア(OCW)について

京都大学OCWは、学内で実際に行われている講義のビデオや教材をインターネットで公開するプロジェクトで、2005年より国内外に向けて講義コンテンツを発信してきました。本学の学生や教職員、他大学の学生、関連学協会の研究者、本学への入学を目指す高校生、スキルアップのためにさらなる学習を志す社会人など、あらゆる方々に門戸を広げ、本学が行っている「教育」を多くの人に知ってもらうことを目的としています。また教育情報の公開を目的として、全部局のシラバスにOCWからアクセスできるようになっており、2020年度からは英語版シラバスの公開もはじめました。これまで蓄積されてきた900以上の教育コンテンツを

どのように学内の授業等で活用していくか、高等教育研究開発推進センターに設置された教育コンテンツ活用推進委員会において議論・検討されています。今後も、世界へ向けて本学のビビリティを高め、教育・研究から生まれた知識を広く社会に提供できるように、コンテンツを充実させていきます。OCWは、人類の知的資産への貢献とその共有を目指して、世界各国とのコミュニケーションを高め、国際交流を推進します。OCWのコンテンツ制作は、高等教育研究開発推進センターの教職員と学生スタッフで、講義収録、編集を行っています。みなさまもOCWを通じて講義コンテンツを公開してみたいはいかがでしょうか。

2. KyotoUx:大規模オープンオンライン講義(MOOC)

(1) 本学におけるMOOC

本学は、MOOC(Massive Open Online Courses:大規模オープンオンライン講義)プラットフォームのedX(<https://www.edx.org>)を通じ、全世界に向けて英語による無償のオンライン講義を配信しています。OCWも本学の教育についてインターネットを通じて世界に公開するという「教育のオープン化」に関わるプロジェクトですが、MOOCは大学の講義と同様に、開講期間が設けられており、受講者は毎週の講義内容を講義ビデオや課題に取り組みながら学習を進められることが特徴です。担当の教員に質問しながら、課せられた問題や試験に解答し、一定の成績を満たした受講者¹には修了証が発行されます。このように、文化や学歴も多様な世界中の受講者と一緒にオンラインで交流しながら学習を進めるMOOCは、高等教育の新しい講義提供方法として世界的に利用が広がっています。

edXは、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学が中心となり設立された、世界トップクラスの大学や教育機関、企業等で構成されるMOOCの大学コンソーシアムです。本学は世界トップレベル59校から成るチャーター校として日本で初めて参加し、「KyotoUx」という名称で講義を配信しています(図1)。

MOOCの制作や運用、分析・評価については、高等教育研究開発推進センターが担当部局となっており、2020年度は新規1講義を含む12講義が開講されました(表1)。これらの講義には、これまでに世界中から26万名以上の受講がありました。

今年度、新規に開講した「Introduction to University Social Responsibility」は、4週間の講義で、edXの加盟機関である香港理工大学と本学の連携のもと、University Social Responsibility(USR:大学の社会的責任)に関する国際大学コンソーシアムであるUSR Networkの協力を得て、2大学の合同講義として公開しました。本講義では、USRの第一人者であるRobert Hollisterタフツ大学名誉教授による理論的解説や、USRに先進的に取り組んできた世界の大学の実践事例から「大学の社会的責任」について学ぶことができます(図2)。

この新規開講の講義を含め、多くの講義が再開講により受講登録可能となっています。ご自身の講義の配信に興味がありましたら、一度アクセスしてみてください。



図1 edXのサイト(KyotoUxからの提供講義)

注1: 受講者が修了証を得るためには有償(現在は\$49)のVerified Trackに登録する必要があります。

表1 2020年度開講講義(所属は開講当時)

開講時期	講義名	講義担当者	配信期間*	備考**
4月2日～ 2021年3月18日	The Chemistry of Life	上杉 志成 教授(物質・細胞統合システム拠点/化学研究所)	13ユニット セルフペース	7回目
4月2日～ 2021年3月4日	Introduction to Statistical Methods for Gene Mapping	山田 亮 教授(医学研究科)	4週 セルフペース	6回目 JGP
4月2日～ 2021年1月6日	Origins of the Human Mind	松沢 哲郎 教授(霊長類研究所・高等研究院)	5週 セルフペース	3回目
4月2日～ 2021年3月4日	Introduction to Animal Ethics	伊勢田 哲治 准教授(文学研究科)	5週 セルフペース	4回目 JGP
4月2日～ 2021年3月4日	More Fun with Prime Numbers	伊藤 哲史 准教授(理学研究科)	5週 セルフペース	4回目 JGP
9月3日～ 2021年8月3日	Introduction to Geochemistry	小林 洋治 准教授(工学研究科)	7週 セルフペース	2回目 JGP
9月17日～ 2021年8月3日	Evolution of the Human Sociality: A Quest for the Origin of Our Social Behavior	山極 壽一 総長	6週 セルフペース	5回目
9月17日～ 2021年8月3日	The Extremes of Life: Microbes and Their Diversity	跡見 晴幸 教授(工学研究科)	4週 セルフペース	6回目 JGP
9月17日～ 2021年8月3日	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga	児玉 聡 准教授(文学研究科)	10週 セルフペース	6回目 JGP
9月17日～ 2021年8月3日	Culture of Services: Paradox of Customer Relations	山内 裕 准教授(経営管理大学院)	8週 セルフペース	4回目
9月17日～ 2021年8月3日	Stochastic Processes: Data Analysis and Computer Simulation	山本 量一 教授(工学研究科)	6週 セルフペース	5回目 JGP
2021年2月17日 ～3月17日	Introduction to University Social Responsibility	Robert Hollister 名誉教授(タフツ大学) Fernando Palacio 講師(国際戦略本部) Grace Ngai 准教授(香港理工大学) ほか	4週	新規 香港理工大学 との合同講義

* 配信期間欄の“セルフペース”は、開講時にすべての講義コンテンツが公開され、講義終了までに受講者自身のペースで学習を進める講義形態です。

** 備考欄の“JGP”はスーパーグローバル大学創成事業「京都大学ジャパングートウェイ(JGP)」からの提供講義です。これらの講義は本事業の助成を受け開講しています。また、回数は再開講を表しています。



図2 2020年度新規講義「Introduction to University Social Responsibility」より

(2)FDの機会としてのMOOC

世界中の人々に英語で提供するMOOCの制作や提供は、担当する教員にとっては講義ビデオの収録や自動採点が可能なテストの作成、掲示板での質問対応など、授業改善という点でFDの機会ともなっています(図3・4)。講義終了後に高等教育研究開発推進セン

ターのスタッフが受講履歴やアンケート結果などのフィードバックの機会を設けており、次回開講に向けた講義コンテンツの改善を行うことも少なくありません。



図3 専門スタッフによるMOOCのビデオ制作支援・スタジオでの撮影の様子

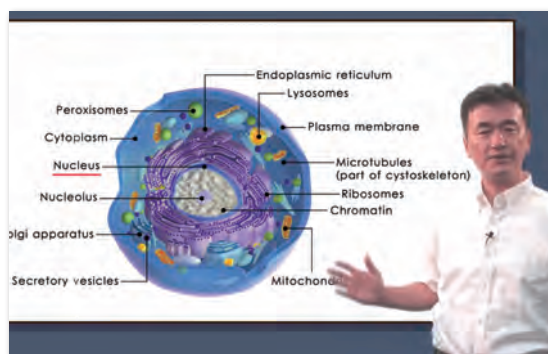
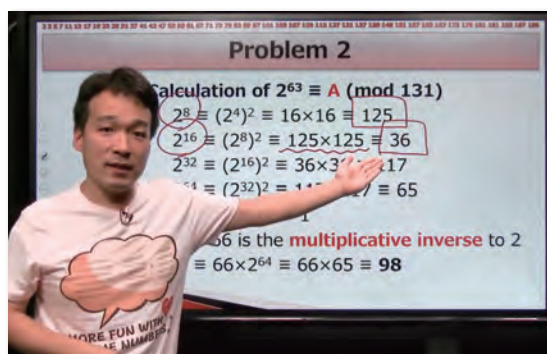


図4 講義スタイルに合わせた講義ビデオの作成

(3)通常授業でのMOOCの活用

KyotoUxから提供している講義は、講義担当教員により本学の教育にも活用されています。

上杉志成教授(物質-細胞統合システム拠点/化学研究所)による「The Chemistry of Life」は、2020年度で7回目の開講となりますが、元々、学内の学部生を対象とした講義の際に反転授業の教材としてデザインしており、当該講義の受講者は対面の授業を受ける前にあらかじめオンライン教材で学習することが求められていました(図5)。こうして、一方向的な講義に使用していた時間をグループディスカッションや教員・学生間の双方向的なやりとりで充てるよう授業の改善が試みられています。このほか、MOOC内における課題の成績を正課授業の成績の一部に採用するケースもあり、今後、学内の教育に対しても様々な場面で有効に活用されることが期待できます。



図5 「生命の有機化学」の講義風景

(4) MOOCのアセスメント

高等教育研究開発推進センターの教育アセスメント室では、本学が提供するMOOCについてのさまざまなデータを収集し、講義改善や学内での普及・拡充のために調査研究を行っています。

MOOCにおいては、そのプラットフォームであるedXから、受講者情報(年齢、性別、最終学歴、地理的情報など)や、また課題への取り組みや講義ビデオの視聴の様子といった学習者の学習履歴が提供されます。さらに、それらの情報とは別に、SurveyMonkeyを利用して、講義受講前後の情報(受講動機、事前の知識、満足度、事後のコメントなど)をオンラインアンケートから独自に収集しています。そして、それらの情報を集計分析し、コースレポートを作成します(表1)。

表1 コースレポートの構成

コースの基本情報	タイトル、担当教員名、開講期間
レポートの要約	コースレポートの内容を1ページに要約したもの
学習者の人口統計学的指標	性別、年齢、最終学歴、地理的情報
学習者の成績情報	登録者数における成績内訳、分布
行動ログに基づく集計	課題への取り組み、ビデオの視聴状況
前後のアンケートデータの集計	受講動機、MOOCの事前経験、事前知識、満足度
受講者からのコメント	コースの改善や感想などを一覧にまとめたもの

作成されたコースレポートは、制作チームと合同で、基本的には対面(今年度はコロナ禍でオンライン)でフィードバックを行っています。ただし、再開講のコースや、教員との都合がつかない等で、メールでフィードバックを行う場合もあります。そのため「リフレクション・サーベイ」を導入しています。これは、メールでのフィードバック時に、対面時と同じく、コース改善に資する議論を行ったり、教員へのリフレクションを促したりすることを目的としています。2020年度は、2021年1月時点で、MOOCでは対面(オンライン)で1件、メールでの送付を11件のフィードバックを行いました(延べ数)。

さらに、開講回数が5回となった3コースについては、登録者属性について追加分析を行い、5回分の推移を別途報告しました(図1)。

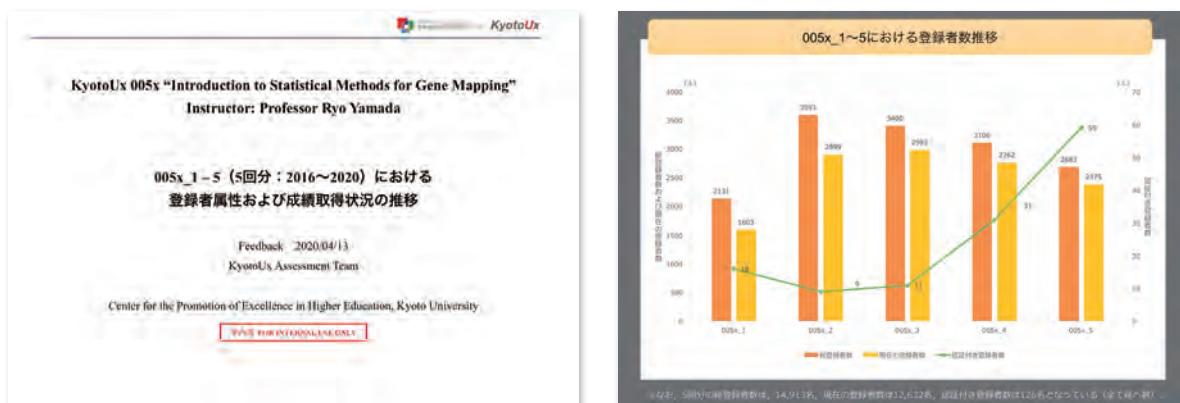


図1 追加分析のレポート例(左:表紙、右:005x_1~5における登録者推移)

3. KoALA : 学内向けオンライン講義(SPOC)

(1) KoALAについて

本学は、2014年以降、edXを通じてMOOCを提供してきました。この経験を活かし、高等教育研究開発推進センターは、主に、学生・教員が授業内外で利用することを目的として、2016年度から「Open edX」を利用した学内向けオンライン講義配信システム「KoALA(コアラ)」を導入し、2018年度より正式に運用しています(図1)。なお、KoALAでは日本語でも講義コンテンツを制作・提供することができます。

高等教育研究開発推進センターは、学内や教員固有の目的や

ニーズに応じた講義や教材を制作し、特定の受講生に向けて講義を提供したり、学習データの分析や教員へのフィードバック等の活用を行っています。KoALAは、学内の正課授業の受講生を対象としたオンライン教材の配信を目的としていますが、自前のプラットフォームを有することで多様な講義配信形態を実現することができ、学内の正課授業のほか、個別のニーズに応じて研修プログラムをオンライン化したり、一部の講義は一般公開したりするなど、幅広く活用しています。

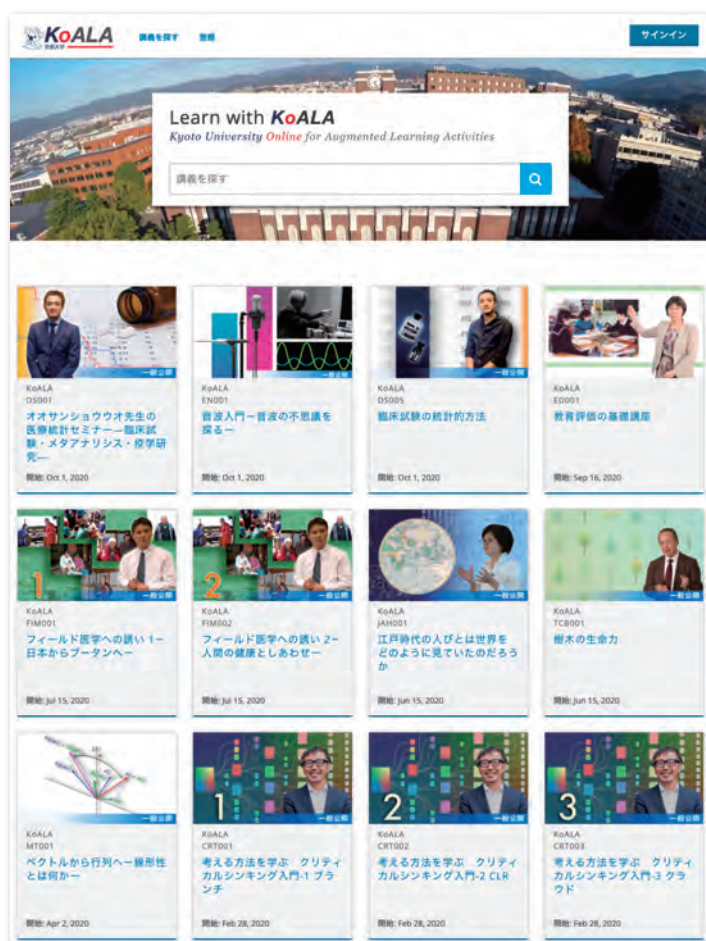


図1 KoALAの画面例(左:トップページ、右:講義ビデオより)

2020年度は、既存講義の再開講を含め、表1に示す23講義をKoALAより提供しました。このうち1講義は2020年度に新規に開講した講義です。同一講義の年度内の複数回開講は、異なる授業の受講者が対象となっています。これらの講義には、これまで2000名以上の本学の学生の受講がありました。

高等教育研究開発推進センターでは、今後も学内の正課の授業での活用を中心に部局や教員のニーズに応じ、一般公開のコンテンツも含めてKoALAの開発を進めていきます。KoALAの講義は一般公開しているものがありますので、ご自身の講義の配信に興味がありましたら、一度アクセスしてみてください。

表1 2020年度開講講義

開講時期	講義名	講義担当者	配信期間*	備考
4月2日～ 2021年3月18日	ベクトルから行列へー線型性とは何かー	三輪 哲二 名誉教授 (国際高等教育院)ほか	10回 セルフペース	3回目 OCW再利用
4月2日～ 8月9日	オオサンショウウオ先生の医療統計セミナー ー臨床試験・メタアナリシス・疫学研究	田中 司朗 特定教授 (医学研究科)	4週 セルフペース	5回目
4月2日～ 8月9日	臨床試験の統計的方法	田中 司朗 特定教授 (医学研究科)	4週	2回目
4月2日～ 6月30日	国際政治経済学「2回生演習」	坂出 健 准教授 (経済学研究科)	7週 セルフペース	6回目 正課向け
4月2日～ 6月30日	国際政治経済学 「国際政治経済分析・国際経済関係論」	坂出 健 准教授 (経済学研究科)	7週 セルフペース	6回目 正課向け(院)
4月7日～ 9月30日	統計の入門	田村 寛 特定教授 (国際高等教育院データ科学教室)	7回	3回目 正課向け(学部)＋一般公開
5月7日～ 8月9日	臨床試験	田中 司朗 特定教授 (医学研究科)	3週	3回目 正課向け(院)＋一般公開
6月15日～ 2021年4月30日	江戸時代の人びとは世界をどのように 見ていたのだろうか	岩崎 奈緒子 教授 (総合博物館)	1回	2回目 高校生向け
6月15日～ 2021年4月30日	樹木の生命力	高部 圭司 名誉教授	1回	2回目 高校生向け
6月17日～ 7月31日	電気電子回路入門	下田 宏 教授 (エネルギー科学研究科)	6週	4回目 正課向け(学部2)
9月16日～ 2021年3月31日	教育評価の基礎講座	西岡 加名恵 教授 (教育学研究科)	6回	2回目 研修プログラム(学校・教育関係者向け)
10月1日～ 2021年3月18日	オオサンショウウオ先生の医療統計セミナー ー臨床試験・メタアナリシス・疫学研究	田中 司朗 特定教授 (医学研究科)	4週 セルフペース	6回目
10月1日～ 2021年2月4日	数理・データ科学のための数学Ⅱ	中野 直人 特定講師 (国際高等教育院)	11週	2回目 正課向け(学部)
10月1日～ 2021年1月6日	統計の入門	田村 寛 特定教授 (国際高等教育院データ科学教室)	7回	4回目
10月1日～ 2021年3月18日	臨床試験の統計的方法	田中 司朗 特定教授 (医学研究科)	4週	3回目
10月1日～ 2021年8月3日	音波入門ー音波の不思議を探る	北野 正雄 教育担当理事	1回 セルフペース	3回目
10月14日～ 2021年1月27日	初修物理学B	下田 宏 教授 (エネルギー科学研究科)	2週	3回目 正課向け(学部1)
10月7日～ 2021年1月6日	国際政治経済学「経済史2」	坂出 健 准教授 (経済学研究科)	7週	8回目 正課向け(学部2)
2021年3月～	因果推論	田中 司朗 特定教授 (医学研究科)	3週	新規
2021年3月1日～ 2022年2月28日	考える方法を学ぶ クリティカルシンキング入門-1 ブランチ	若林 靖永 教授 (経営管理大学院)	1回	3回目 高校生向け
2021年3月1日～ 2022年2月28日	考える方法を学ぶ クリティカルシンキング入門-2 CLR	若林 靖永 教授 (経営管理大学院)	1回	3回目 高校生向け
2021年3月1日～ 2022年2月28日	考える方法を学ぶ クリティカルシンキング入門-3 クラウド	若林 靖永 教授 (経営管理大学院)	1回	3回目 高校生向け
2021年3月1日～ 2022年2月28日	考える方法を学ぶ クリティカルシンキング入門-4 ATT	若林 靖永 教授 (経営管理大学院)	1回	3回目 高校生向け

*配信期間欄の「セルフペース」は、開講時にすべての講義コンテンツが公開され、講義終了までに受講者自身のペースで学習を進める講義形態です。

**学内の正課の授業で利用した場合、対象学年等を記入しています。

(3) KoALAによる多様なオンライン講義の配信・活用について

① 正課の授業での利用

KoALAでは、主に以下の2つの形態でオンライン講義を配信しています。

(a) 対面授業の代替(オンデマンド型授業での利用)

通常は対面で行う授業の1コマから数コマ分をオンライン講義で代替する形態です。講義に登録された受講者は、その週の教材に自宅などから自由な時間にKoALAにアクセスして学習し、翌週の対面の授業までに課された課題に取り組みます。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本学では、オンラインでの授業の実施が要請されたことにともない、これまで対面で実施してきた授業をオンライン授業に移行する必要が生じました。例えば、2018年度から開講している「電気電子回路入門」では、従来、学内の大講義室において対面形式で行っていた授業の一部を、KoALAを活用してオンラインで提供しました。2019年度までのKoALAでは、回路シミュレータや実物の電子回路によるデモを含む講義ビデオとオンライン課題を隔週で3週間分提示し、受講者が自宅や下宿等においてオンデマンドで学習する方式を採用していました。2020年度は、3週分の講義ビデオと課題を新たに作成し、KoALAを利用したオンデマンド型のオンライン授業として提供しました。

例：「電気電子回路入門」「初修物理学B」等

(b) 反転授業での利用

教室においてグループディスカッション等の能動的な学習活動の時間を確保するため、一方向的な講義部分を講義ビデオやオンラインクイズ形式であらかじめ受講者に提示しておきます。例えば、2018年度から開講している「臨床試験」では、数週間分の授業を反転授業として実施されましたが、講義ビデオを事前に受講者が視聴することで、教室内での討論の時間が増加しました。なお、本講義は一般にも公開し、受講者以外でも討論の様子を事後的に視聴することができるようにしています。

例：「臨床試験」「国際政治経済学」等

このほか、授業の予復習やリメディアルの目的で講義を提供しているケースがあるなど、今後、提供形態がより多様化することが期待されます。

② 一般公開・その他の目的での利用

(a) 一般公開

4週間の講義「オオサンショウウオ先生の医療統計セミナー」は、医療統計分野の大学院プログラムの開設に先立ち提供を開始しました。本講義は、医療系分野をはじめ、理学、工学、経済学等の関連分野の学習者にも医療統計という学問分野を知ってもらうことが目的の一つであったため、講義は一般公開としました。また、より多くの受講者を集めるため、講義の魅力を伝える紹介ビデオを制作しKoALAから公開しています。本講義は現職の医師の受講も多く、リカレント教育の場を提供する機会にもなっています。

例：「オオサンショウウオ先生の医療統計セミナー」「統計の入門」等

(b) 社会貢献：高校生向けオンライン講義の提供

KoALAから提供するいくつかの講義は、高校生向けに提供しています。「音波入門—音波の不思議を探る」は、二種類のマイクroフォンを使った音波の干渉実験やコンピュータシミュレーションを通じて、変位と圧力という高校と大学で扱いが異なる音波について学びを深める機会を提供しています。意欲の高い受講者向けに、やや難易度の高い解説用の講義ビデオも提供し、大学での学びとの接点を意識してもらう構成になっています。

例：「音波入門—音波の不思議を探る」「考える方法を学ぶクリエイティブカルシキング入門-1 ブランチ」等

(c) 研修プログラムでの活用

「教育評価の基礎講座」は、教育学研究科教育実践コラボレーションセンターが主催する教員、教育委員会関係者、学生等を対象とした「教育評価」に関する研修プログラムです。元々、対面で実施していたプログラムをオンライン化し、プログラムへの参加登録者に限定して1ヶ月ごとに講義ビデオ等の教材が配信されます。これにより、受講者は自宅等で自由な時間にアクセスし、教育評価に関する基本的な考え方や進め方を学ぶことができます。なお、本講義の講義ビデオの一部は既存のOCWコンテンツを再利用しています。

例：「教育評価の基礎講座」

(4) SPOCのアセスメント

高等教育研究開発推進センターの教育アセスメント室では、本学が提供するSPOCについても、MOOC同様、さまざまなデータを収集し、講義改善や学内での普及・拡充のために調査研究を行っています。

SPOCにおいても、MOOCと同様の情報をOpen edXのInsightsから得ることが可能です。しかし、SPOCにおいては、一般の人向けに作成されたものから、学内の授業と連動して（反転授業のように）使用されるものまでさまざま、その用途や受講者数はMOOCとは大きく異なります。そのため、MOOCのコースレポートの内容は、おおよそのコースで統一的なものになっていますが、SPOCにおいては、たとえ同一の教員が行うコースであっても、その内容は異なり、それぞれのコースに合わせた集計や分析を行っています（例えば、図1、2）。

DS001 “オゾンシミュレーション”の基礎統計セミナー——臨床試験・データ分析・疫学研究——	DS005 “臨床試験の統計的方法”
目次 ■ 授業の概要 (表1) ■ 受講生について (表2) ■ 事前アンケートの結果 ✓ 受講の動機 (図1) ✓ 受講生の専門分野 (図2) ■ 事後アンケートの結果 ✓ オンライン講義の満足度 (図3) ✓ キャリア活用に対する期待 (図4) ✓ 全体的な感想と回答者の総合的満足度 (表3) ✓ 「対面」授業の受講状況 (図5) ✓ 予復習の時間 (図6) ✓ 到達目標①～③に対する効果 (図7) ✓ 授業デザインに対する満足度 (図8) ■ 事前・事後アンケート両者からの結果 ✓ 受講生の関心・意欲 (図9) ✓ 受講生の知識 (図10) ■ レビュー	目次 ■ 授業の概要 (表1) ■ 受講生について (表2) ■ 事前アンケートの結果 ✓ 受講の動機 (図1) ✓ 受講生の専門分野 (図2) ■ 事後アンケートの結果 ✓ オンライン講義の満足度 (表3) ✓ キャリア活用に対する期待と全体的な感想 (表4) ■ 事前・事後アンケート両者からの結果 ✓ 受講生の関心・意欲 (図3, 表5) ✓ 受講生の知識 (図4, 表6) ■ レビュー

図1：同一の教員における各コースレポートの項目(左：DS001一般+学内向け、右：DS005一般向け)

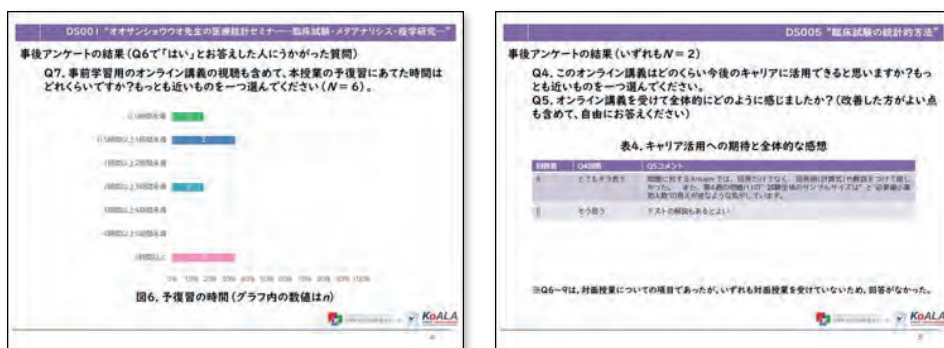


図2：同一の教員における各コースレポートの内容(左：予復習の時間、右：キャリアへの活用期待度)

SPOCでも作成されたコースレポートのフィードバックを行っており、2020年度は、2021年1月時点で、対面(オンライン)で2件、メールでの送付を14件に、コースレポートのフィードバックを行いました(延べ数)。メール送付でのフィードバックには、MOOC同様にフレクシオン・サーベイを導入しています。サーベイでは、教員の授業へのリフレクションを促進することや授業改善への動機づけを高めることをねらい、次のような内容の項目を用いています。

- どのような層を念頭に講義を行ったか
- 今後の活用方法
- 受講生の属性や課題への取り組み、視聴態度、受講生による評価への満足度
- 受講生のコメントからオンライン講義に活かせるような内容
- フリーコメント

4. ICT活用教育のためのポータルサイト (CONNECT)

(1) CONNECTとは

CONNECT (CONtents for Next Education and Communication with Technology) とは、本学の教職員に向けて、ICTを利用した教育コンテンツを制作・活用するための情報を提供するポータルサイトです。2017年度に教育コンテンツ活用推進委員会のもとで高等教育研究開発推進センターにより構築されました。

本学ではこれまでに、MOOCやSPOC、OCW*、PandA**といったICTを利用した教育コンテンツやプラットフォームを全学として整備・運用してきました。そのうち、上記のセンターではMOOC、SPOC、OCWの制作・運用を担当しています。CONNECTは、こうした多様なICTコンテンツ・プラットフォームを制作・活用する上で必要となる情報を一つのウェブサイトにとまとめ、目的別に適切なサイトへと誘導しています。

本学には多数の外国人教職員もおられるため、日英両言語に対応しています。

* MOOC、SPOC、OCWについては、それぞれ、pp. 30-32とpp. 33-36、p. 29 をご覧ください。

** PandAは情報環境機構が全学に提供している学習支援システム (LMS: Learning Management System) です。



CONNECT: <https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/>



(2) Topics内のインタビューについて

CONNECTには、主に「Projects」「Topics」「How To」「Resources」というコンテンツがあります。2020年度には「Teaching Online@京大」(pp. 40-43参照)がその下位ページとして追加されました。

「Topics」では、本学の教職員を対象としたインタビュー記事や、ICT活用教育に関連するイベントの開催報告記事を公開しています。前者では、これまでに19名の、ICTを用いた特徴のある授業をおこなっている教員ならびに教育支援に携わっている職員に話を聞いています(図1)。次ページ以降では、そのうち、2つの記事を紹介しています。



図1 Topicsで紹介されているインタビュー記事一覧

インタビュー抜粋



上杉 志成 化学研究所・物質細胞統合システム拠点 (iCEMS) 教授

「京都メソッド」から始まった「反転授業」とその展開

上杉先生は、ケミカルバイオロジー分野でのアイデア創発に焦点を当てたMOOC「001x The Chemistry of Life」を2014年4月から毎年1回ずつ配信されています。本学初のMOOCを制作するようになった経緯や、その後、これまでに取り組まれてきた様々なご実践についてお話を伺いました。

*インタビューの全文はこちら：

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/topics/uesugi01.php>



MOOC配信に取り組まれたきっかけを伺えますか。

当時、本学の総長だった松本紘先生からの電話がきっかけです。「インターネット講義というのがあり、edXからオファーがあった。誰にお願いをしようかと考えたところ、上杉さんの名前がポーンと頭に浮かんだ。ということでやってくれないか」。

これを聞いて、正直、大変だなと思いました。でも、口では「喜んで」と答えました(笑)。せっかくやるなら、「京都メソッド」とでも呼ばれるくらいのことをやろうと思ったんです。そこで、松本先生にはこちらからも色々提案してみました。大変なことを嫌々やると本当に大変ですが、楽しんでやれば、大変さもやわらぎます(笑)。

「京都メソッド」の作成にあたり、どんな工夫をされたのですか。

一つ目は、第一回目講義の課題として出した「くすり座 (Drug Constellation)」の試みです。通常の授業では、受講者に自分のアイデアを手描きの化学構造式とイラストで表現して提出してもらっています。コピペを排除し、評価スピードを上げるためです。この手法をMOOCでも採用し、サイト上に化学構造式描写ソフトとお絵描きソフトを組み込みました。

その上で、「くすり座」の課題では、売上高100位以内の小分子医薬品の化学構造式とその形を模したイラストを、受講者にオンライン上で作成し提出してもらいました。星の位置を単純に記憶するのは退屈ですね。でも星座に置き換えると面白くなるでしょ。「くすり座」は化学構造式を面白くするのです。



(左) 上杉先生が出された「くすり座」の課題から生まれた「一家に1枚くすりの形」
(右) 上杉先生のMOOC講義の一場面

なるほど。ただ、受講者数を考えると、採点は苦労しそうですね。

その採点方法も、「京都メソッド」の一部です。「くすり座」やそれ以外の宿題にPeer Evaluationという方法をとりました。まず、受講者同士で相互に評価してもらい、上位となったものだけをこちらで手動で採点するのです。

「バーチャルからリアル」と称して、初年度には、成績優秀だった受講者6名を実際に京都に呼びました。そのときは、2万人いる受講者の中から、Peer Evaluationと手動で80名強に絞った上で、さらに幾つかの課題を課して、その結果をもとに6名を選びました。会ってみると皆優秀で、その成果は予想以上でした。

これまでMOOCを配信される中で、ご自身の変化はありましたか。

はい、ありました。一つ目の変化は、ビデオ講義に慣れたという点です。二つ目は、オンライン講義の良さを感じることができたという点でしょうか。それま

での講義が、ライブのようなものだとしたら、MOOCはテレビのようなものです。言葉遣いなど色々と気にすべき要素が出てきますよね。最初はその違いに戸惑ったのですが、一旦慣れると、英語で全世界に発信しているため、沢山の人が見てくれるという点でメリットが感じられるようになりました。撮影も含めて授業は大変だけれど、大変さが報われている気がします。

三つ目が、「反転授業」です。MOOCがなかったら反転授業を始めませんでした。反転授業はMOOC最大のメリットと考えています。



(左) 6名の成績優秀な受講者を京都に呼んだときの写真 (iCeMS 提供)
(右) 反転授業時の対面授業の様子

上杉先生といえば、反転授業のイメージです。もう少し伺えますか。

反転授業を取り入れることで、通常の授業をインタラクティブなものにできました。講義パートはMOOCとして自宅でネット上で受けてもらい、対面授業中は演習や議論に集中してもらえるので効率が良くなりました。本学の授業は、もしオンライン講義を既に作っているなら、全部反転授業にした方が良いでしょうと思います。

実際に受講者のアンケートでも、もっと反転授業形式の授業を受講したいという声が多いです。みんな一度ビデオを見ていますから、対面授業では臨機応変に対応できます。以前は、説明だけで終わっていたところが、反転授業により、課題作業とコメントに時間を当てられるようになりました。

海外でも反転授業をされていると聞きました。

はい。ACBI (Asian Chemical Biology Initiative) という、ケミカルバイオロジーという学問の種をアジアの新興国に植えていくというプログラムの一環として、ACBI Sponsored Classというのを開いています。ベトナムやフィリピン、インドネシアといったアジアの国々に行き、授業をおこなうというものです。前もってMOOCを視聴してもらって、私が向いて反転授業をパッとやるのです。

現地の教員に授業のモデルを伝えたいんですね。そしてできれば反転授業をやってもらい、必要なら私のMOOCを使ってと伝えるのです。事前学習は私のMOOCを利用し、対面授業は現地の先生が行うというモデルを提供できたらいいですね。

この他にも、国内外の専門家同士でティーチングリソースのシェアにも取り組んでいます。このアイデアもMOOCを制作して思いついたものです。

振り返ると、MOOCの取り組みは「一石二鳥、三鳥」となっています。

(CONNECT掲載中の記事より、抜粋・改変)



北村 由美 附属図書館研究開発室 准教授

坂本 拓 附属図書館・利用支援掛(当時) 掛長

学生の多様な学習をサポートする図書館機構の取り組み

本記事は、附属図書館研究開発室の北村由美准教授と利用支援掛(当時)の坂本拓掛長へのインタビュー記事をまとめたものです。附属図書館をはじめとする本学の図書館・室が提供するサービスについてお話を伺っています。

ここで紹介するインタビューは新型コロナウイルス感染症拡大以前に実施したものです。この度、同感染症拡大以降、附属図書館ならびに各図書館・室が学生の教育・研究活動を支援するべく実施してこられた各施策について、北村先生に特別にご寄稿いただきました。本記事下部の四角囲みのコーナーをご覧ください。

*インタビューの全文はこちら：

<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/topics/librarians01.php>



附属図書館のラーニングコモンズについてお話を伺えますか。

(北村)附属図書館のラーニング・コモンズは、2014年4月にオープンしました。学生や教職員がグループで一緒に話しながら学習を行うことのできるスペースを目指しています。

企画段階では、本学に初めてできるラーニング・コモンズなので、様々な立場の人に入ってもらって空間を作っていくということになりました。そのため図書館員だけでなく、他部局の先生や学生、デザイナーとも協働して検討していきました。そこでの議論を経て、本学のシンボルであるクスノキの根元に人が集まってきて、それが広がっていくというイメージと、「学びの実験場」というコンセプトが決まりました。



(左) 企画段階で出たデザイン案を紹介してくださった北村先生
(右) デザイン案の拡大イメージ



先ほどお話しした「学びの実験場」というコンセプトですが、そこで起こってほしいことに、「知のチラ見」があります。本学はすごく大きな大学ですが、自分の専門のことに集中する人も多いので、横の人と直接話さなくても、隣の議論の様子を見て、刺激を得られるような場になってほしいと考えています。

ラーニング・コモンズは、固定された空間ではなく、「成長していく空間」です。

利用者のニーズに合わせて空間の使い方も変わっていったらいいと思っています。

学習・研究支援という観点では、イベントや講習会も多数実施していますね。

(坂本)図書館機構では、図書館の利用案内だけでなく、KULINEをはじめとする様々なデータベースの利用法や、論文・レポートの調べ方など、多様なニーズに対応した講習会を実施しています。学生のアンケートを見ると、学生にとっても発見があるようです。

イベントや講習会を通して、結果的に、先生の教育をサポートできればと考えています。

ICTと教育というテーマではいかがでしょうか。

(坂本)電子書籍や電子ジャーナルなど、電子リソースに対する学生のニーズは高いですね。図書館機構では、論文や貴重資料の電子化・オープンアクセス化を推進するだけでなく、電子ブックの試読サービスも実施しました。紙の年間貸出冊数はあまり変わっていませんが、電子書籍のニーズは高くなっていると感じています。

学生のニーズも変わっていているのですね。

(坂本)はい。学生の要望や図書館の利用の仕方も、以前と比べて多種多様になっているように感じます。多様な学習ニーズに合わせたサポートを、これからも行っていきたいと考えています。

(CONNECT掲載中の記事より、抜粋・改変)

コロナ禍における図書館機構の取り組み

附属図書館研究開発室 准教授 北村 由美

新型コロナウイルスの感染状況が刻々と変化する中、期末課題や試験の際に、図書館利用の制約に戸惑ったり、所属学部・研究科以外の図書室の状況が分かり辛いと感じておられる方は少なくないでしょう。2020年4月に入学し、本学の図書館・室がどのようなリソースやサービスを提供しているのか分からないとお困りの方もおられるかもしれません。この場を借りて、本学の図書館機構のサービスに関連した、いくつかのサイトを紹介したいと思います。

- まず、最初に紹介するのは、学内図書館・室のサービス状況を確認できる「新型コロナウイルス感染症対策に伴う各図書館・室のサービス変更等について」という一覧です。この一覧へは、京都大学蔵書検索システムkulineの上部フレーム内の赤いバナーからリンクされていますので、検索結果を確認した後に、所蔵館のサービス状況を確認して下さい。 <https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1384494>
- 次は、「自宅学習のための電子リソース活用について」というサイトです。図書館が購入している電子リソース(データベース・電子ジャーナル・電子ブックなど)の多くは、自宅からのアクセスが可能です。また、コロナ禍に対応して、出版社が利用の範囲を一時的に拡大していることもあります。こちらもkulineの上部フレーム内のバナーからリンクされています。 <https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/service/1385204>
- データベースの使い方や、レポートの書き方で迷うことがあれば、図書館に来ることが難しい状況でも、職員や院生スタッフによるオンライン講習会を受講できます。録画も用意されていますので、参加できなかった回の方もご活用ください。
 - ◆ 附属図書館講習会(今年度の職員の講習会が一覧できます) <https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/mainlib/service/workshops>
 - ◆ 学習サポートデスク：オンライン学習相談や今年度の講習会情報 <https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/support/12334>
- 最後になりますが、資料収集や学習の進め方で迷うことがあれば、気軽にお問合せ下さい。学習サポートデスクでは、院生スタッフによるオンライン学習相談にも応じています。 <https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/form/14057>

5. Teaching Online@京大の開発と公開

本学では、オンライン授業(のちにハイブリッド型授業を含む)に関する情報を、広く本学の構成員に向けて整理・紹介・提供するためのWebサイト「Teaching Online@京大」(以下、「TO@京大」)を開発し、2020年3月26日に公開しました。開発・公開・運営には高等教育研究開発推進センター(以下、「高等教育センター」)が携わっています。

同サイトは、2020年12月20日までの約9ヶ月の間に473,600PV(ページビュー)を記録し、学内からだけでなく全国からも広くアクセスを集めています。以下、その開発コンセプトと各種コンテンツの内容・特徴、アクセス状況について、ご紹介します。



図1 Teaching Online@京大のトップページ・イメージ
<https://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/connect/teachingonline/>



(1) 開発の背景とコンセプト、経緯

2020年3月中旬、前期のオンライン授業実施が現実味を帯びるなか、オンライン授業に関する情報に特化した、本学の教職員向けのサポートリソースが必要とされました。それを受けて、高等教育センターを中心に、情報環境機構や教育推進・学生支援部の協力のもと開発されたのがTO@京大です。

オンライン授業を実施する上で必要となる知識やノウハウ、リソースを整理、紹介、提供する本サイトですが、そのキャッチコピーは「オンラインでもできること・オンラインだからできること」となっています。これは、「コロナ禍の今・すぐ」に必要とされている情報を、タイミングよく提供、更新することに加えて、やがてくる「ポスト・コロナ」の時代に、オンライン授業で培ったノウハウを活用した授業実践が加速することを見据えて決めたものでした。

開発にあたっては、ハーバード大学の「Teach Remotely」やスタンフォード大学の「Teach Anywhere」といった海外の先行事例が参考とされました。その際、「ポスト・コロナ」の時代を想定し、特設サイトを新たに開設するというはせず、本学が保有する既存のサイトCONNECT(pp. 37-39を参照)に新しくディレクトリを追加し、そこに構築することにしました。この判断は結果的に、開発期間の短縮とコストの削減にもつながりました。開発に際して中心的な役割を果たした高等教育センターの教職員が総出で取りかかった結果、開発開始から約2週間という短期間で本サイトを公開することができました。



図2 Teaching Online@京大のコンテンツ一覧

(2) コンテンツ一覧

T0@京大のコンテンツですが、2020年12月20日現在、10のカテゴリーに分けて公開されています(図2参照)。まず、I「オンライン授業ってどんなもの?」、II「ハイブリッド型授業とは」では、それぞれオンライン授業、ハイブリッド型授業の類型とそれぞれの具体的な実施方法が紹介されています。オンライン授業／ハイブリッド型授業を初めて実施する方や、その他の実施方法を確認したい方に向けたコンテンツと言えます。

次にIII「オンライン授業で、学習をどう評価するか」では、オンラインで実施できる試験の形態や具体的な実施方法、実施するに際して学生に伝達すべき事項が紹介されています。期末試験に限らない、複数の評価方法も紹介されています。

学生とのコミュニケーションに焦点を当てたのが、IV「学生に何を伝えるか」とV「コミュニケーションをどう取るか」です。前者が、授業準備から授業期間、成績評価までの間に学生に対して何を伝えるべきかを紹介するコンテンツであるのに対して、後者は、授業中の学生とのインタラクションの方法に絞って紹介しています。前者には、学生への説明文言の雛形が複数掲載されており、後者には、具体的なツールの使い方が多数掲載されています。

VI「TAと協働してオンライン授業を行う」では、TAとどのように役割分担しながら授業を実施するかについて扱っています。学習補助者としてのTAがもつ役割の重要性は、オンライン授業／ハイブリッド型授業の経験を経て再確認されたところですが、このページでは、授業の準備から授業中、授業後までの間、教員とTAとで分担して行うべき仕事を整理するとともに、これをまとめた「チェックリスト」も公開しています。最後に、VII「オンライン授業における著作権について」、VIII「学内講習会」、IX「オンライン授業に関するFAQ」、X「オンライン授業リソース」では、それぞれ著作権に関する情報、学内で実施している講習会(詳細はpp. 7-10を参照)の情報、FAQ(学内限定)、学内の個別の研究科・学部並びに海外大学が公開している情報サイトへのリンクを紹介しています。

(3) 特徴的なコンテンツ

ここではT0@京大内の特徴的なコンテンツを抜粋し、紹介します。

① オンライン授業／ハイブリッド型授業の類型と紹介

上記I「オンライン授業ってどんなもの?」とII「ハイブリッド型授業とは」では、それぞれオンライン授業とハイブリッド型授業の類型と具体的な実施方法を紹介しています。

前者では、オンデマンド型、同時双方向型にまず大別し、同時双方向型をさらに、Zoom等で行うフルオンライン授業と、教室で授業を行いつつZoom等でオンラインでも配信する、ハイフレックス型授業に分けて解説しています。オンデマンド型授業のページでは、後述する「7つのステップ」も詳細に説明しています。

後者では、ハイフレックス型、ブレンド型、分散型の3つに分けた上で紹介しています。個々の授業形態に関しては、図3のようなイメージ図とともに紹介することで、初めてハイブリッド型授業に挑戦される方にとってもイメージが掴みやすいように心がけています。

3つのパターンそれぞれについて、一般的な説明文言だけでなく、個々のメリット・デメリットを紹介しています。また、ハイフレックス型授業については、教室の音響設備や受講生の人数、想定する授業内でのインタラクションの大小に応じた実施方法を提案しています。さらに、情報環境機構より提供いただいた実施方法ごとの教室の機器配置図を掲載しており、ハイフレックス授業が初めての方でもすぐにイメージを掴めるようにしています。



図3 ハイブリッド型授業の3つのパターンの紹介図

② オンデマンド型授業における7つのステップ

上記1の下位ページにあたる「オンデマンド型授業」というページでは、授業における教員の役割を7つのステップに分けて説明(図4)するとともに、オンライン授業のデザイン例も公開しています。

オンデマンド型授業の場合、教材と課題の両方に授業内で説明する内容を盛り込んで、作成、提示する必要があります。そのため、対面授業や同期双方向型のオンライン授業とは異なる、授業の設計と準備、授業後のサポートが必要となります。本ページでは、授業デザイン全体という観点から7つのステップを紹介するとともに、各ステップの実施方法を具体例とともに説明しています。

③ 学生に何を伝えるか

上記IV「学生に何を伝えるか」のページでは、授業の準備段階から授業期間中、そして成績評価に至るまでの間で、学生に何を伝えておく必要があるかについて、具体例とともに説明しています。具体的には、授業を始める前に知らせるべきこととして、授業に関する情報やシラバスからの変更点、授業に関する連絡先、感染予防のための行動、受講生が準備しておくべき機材や環境等について説明しているほか、著作権保護の重要性やキャンパス内でオンライン授業を受ける際の注意点、評価に関わる事項、レポートの書き方に関して、紹介しています。これらについては、学生への連絡文言／文章の雛形も適宜参照・利用いただけるようにしています。

④ お問い合わせ窓口一覧とサイトマップ

本サイト(TO@京大)のトップページからは、学内各所のお問い合わせ窓口を整理したページ(図5)ならびにサイト全体のサイトマップ(図6)へとアクセスすることが可能です。前者では、Zoom、PandAを所掌する情報環境機構の窓口、ならびにTO@京大を運営し、学内講習会等を開いている高等教育センターのほか、教務に係るシステムを運用する同教育推進・学生支援部教育情報推進室、そして全学共通科目を開講している同国際高等教育院の窓口の連絡先が掲載されています。後者のサイトマップからは、TO@京大のほぼ全てのコンテンツに、ダイレクトに遷移することが可能です。

なお、TO@京大には、2021年1月8日までに約200件の問い合わせや要望・連絡があり、窓口である高等教育センターが個々に回答しています。

⑤ その他のコンテンツ

その他、TO@京大には、学内限定コンテンツとして、2020年度前期に授業を担当した全教員を対象に実施した「オンライン授業に関するアンケート調査の結果報告」や、よくある質問と回答(FAQ)も掲載されています。

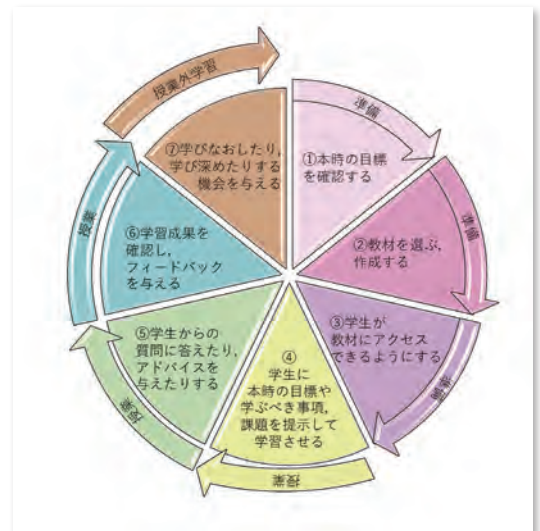


図4 オンデマンド型授業における教員の役割



図5 支援体制・窓口の一覧ページ



図6 サイトマップ

(4) アクセス数とページごとのアクセスランキング(公開日～2020年12月20日)

ここでは、TO@京大の公開日である2020年3月26日から同年12月20日までの約9ヶ月間の、本サイトへのアクセス状況についてご紹介します。本サイトを訪問した1日あたりのPV数の推移を表したのが、図7です。公開直後からアクセスが増え、当初予定されていた前期授業の開始日(4月1日)直前の3月30日に、一つのピーク(9,000PV)を迎えたあと、実際の前期授業日程開始日(5月7日)前後に何度かピーク(最大で4月27日の6,800PV)を迎え、5月下旬以降は横ばいとなっています。もっとも、5月下旬以降も平均して、平日は約1,500PV、週末・休日でも約600PVと大変多く閲覧されていることがわかります。

どのページがよく閲覧されているかをまとめたのが、表1と表2です。前者が、全期間(2020年3月26日～12月20日)のアクセス数ランキング、後者が直近2ヶ月(同年10月20日～12月20日)のランキングです。網掛けとなっているものがTO@京大のページ、それ以外がTO@京大が格納されたサイトCONNECTの各ページです。全期間を通じて、「オンライン授業ってどんなもの?」「ハイブリッド型授業とは」「オンライン授業における著作権」等、オンライン/ハイブリッド型授業全般に関する内容を扱ったページがよく見られています。その一方で、直近2ヶ月間に限るなら、「Googleフォームの使い方」や「Mentimeterの使い方」といった授業の幅を広げるためのツールに関するページや評価に関するページがよく閲覧されています。また全期間を通じて「学内講習会」ページはよく閲覧されており、直近2ヶ月間もその傾向が変わらないというのは特筆すべき点です。



図7 TO@京大のPV数の推移 (2020年3月26日～12月20日)

表1 公開後全期間の閲覧数上位20ページ

ページ タイトル	PV数
1 オンライン授業ってどんなもの? Teaching Online CONNECT	115804
2 Teaching Online CONNECT	66200
3 PowerPoint・Keynote等にナレーションを付け、動画ファイルとして書き出す方法+別途、音声ファイルのみを作成する方法 Teaching Online CONNECT	46685
4 オンライン授業における著作権について Teaching Online CONNECT	29812
5 CONNECT	21045
6 メディアを利用して行う授業 Topics CONNECT	19760
7 ハイブリッド型授業とは Teaching Online CONNECT	19402
8 学内講習会 Teaching Online CONNECT	14698
9 オンラインで行う授業で、コミュニケーションをどう取るか Teaching Online CONNECT	13683
10 学生に何を伝えるか Teaching Online CONNECT	12756
11 Googleフォームの使い方 Teaching Online CONNECT	10548
12 オンデマンド型授業 Teaching Online CONNECT	9229
13 オンライン授業で、学習をどう評価するか Teaching Online CONNECT	5752
14 引用処理フローチャート OCW How To CONNECT	5355
15 オンライン授業リソース Teaching Online CONNECT	4650
16 Mentimeterの使い方 Teaching Online CONNECT	4599
17 How To CONNECT	4136
18 Topics CONNECT	4003
19 MOOC Projects CONNECT	4002
20 Projects CONNECT	3843

表2 直近2ヶ月間の閲覧数上位20ページ

ページ タイトル	PV数
1 PowerPoint・Keynote等にナレーションを付け、動画ファイルとして書き出す方法+別途、音声ファイルのみを作成する方法 Teaching Online CONNECT	16775
2 ハイブリッド型授業とは Teaching Online CONNECT	9339
3 オンライン授業ってどんなもの? Teaching Online CONNECT	5507
4 Teaching Online CONNECT	3716
5 オンライン授業における著作権について Teaching Online CONNECT	2906
6 CONNECT	2492
7 Googleフォームの使い方 Teaching Online CONNECT	1927
8 Mentimeterの使い方 Teaching Online CONNECT	1579
9 オンライン授業で、学習をどう評価するか Teaching Online CONNECT	1419
10 学内講習会 Teaching Online CONNECT	1391
11 メディアを利用して行う授業 Topics CONNECT	1093
12 オンラインで行う授業で、コミュニケーションをどう取るか Teaching Online CONNECT	978
13 2020年度前期 オンライン授業に関するアンケート調査の結果報告 Teaching Online CONNECT	842
14 オンデマンド型授業 Teaching Online CONNECT	710
15 Topics CONNECT	592
16 学生に何を伝えるか Teaching Online CONNECT	584
17 PandA Projects CONNECT	546
18 Projects CONNECT	535
19 MOOC Projects CONNECT	483
20 How To CONNECT	431

(5) 今後公開予定のコンテンツ

今後の予定ですが、(4)の結果も踏まえて、オンライン/ハイブリッド型授業ですぐ使えるツールやテクニックの紹介ページを充実させるとともに、閲覧者のニーズに合わせてコンテンツを紹介できるような仕組みを導入する予定です。本学の教職員にとって有益な情報を一つでも多く紹介していきたいと考えていますので、ぜひ、定期的にTO@京大を訪れてみてください。

6. ワークショップ“Expand your borders, experience Virtual Exchange!”について

本学では2020年3月12日、世界のトップ大学が加盟するグローバルな教育プログラムであるVirtual Exchange Program(以下、VEP*と表記)をテーマとするワークショップ“Expand your borders, experience Virtual Exchange!”(主催: 高等教育研究開発推進センター)を開催しました。

* VEPとはMOOCを利用した単位互換プログラムです。ワーヘニンゲン大学の他に、オランダ・デルフト工科大学、アメリカ・ライス大学、香港科技大学といった世界のトップレベルの大学が参加しています。協定大学の学生は他大学が提供する単位認定対象のコースを選び、自大学での手続きを経てコースを受講します。受講後、プログラム参加者向けの最終試験に合格するなど一定の条件を満たすことにより、自大学の単位を取得できます。

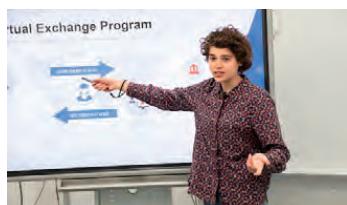
当日は、オランダ・ワーヘニンゲン大学でオープン&オンライン教育チームの一員としてVEPの運営に携わっているIris van Hal氏(経済

学研究科 特別研究学生)を講師に迎え、オンライン講義を用いたヴァーチャルな留学(Virtual Exchange)を通じた新しい学びの可能性について議論しました。本ワークショップには、25名の教職員・大学院生が参加しました。

なお、新型コロナウイルス感染症の流行が本格化する以前に実施された本ワークショップは対面形式で実施されています。

本ワークショップの様子は本学のOCW(p.29を参照)でも動画の形で公開されています。

<https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/opencourse/314>



(1) プログラム

日時・場所

2020年3月12日(木) 於 吉田南1号館201号室

司会

田口 真奈 高等教育研究開発推進センター 准教授

講演

“Expand your borders, experience Virtual Exchange!”

Iris van Hal 氏 (経済学研究科 特別研究学生/オランダ・ワーヘニンゲン大学大学院修士課程院生)

グループワークと質疑応答

“How do you envision the future of (online) education?”

(2) ワークショップの概要

本ワークショップではまず、Iris van Hal氏より“Expand your borders, experience Virtual Exchange!”と題する講演兼話題提供がありました。

海外渡航による一般的な留学プログラムと同様に、国外の大学の講義を受講し、単位を修得できること、そして、オンラインで時間的・空間的制約を超えられるという柔軟な学習形式の強みを活かし、国の枠を超えた学習経験が享受できることがVEPの特長であるとvan Hal氏は指摘しました。

講演の後、短い質疑応答を経て、グループ別のディスカッションに移りました。ディスカッションでは“How do you envision the future of (online) education?”(オンライン)教育の未来をどう見通すかをテーマに、今後の高等教育において予想されるさまざまな状況に関して、VEPのようなオンライン教育/オンライン学習が持つ可能性だけでなく、質保証やアクセシビリティ、持続可能性といった観点について議論が交わされました。

グループワークで出た意見(抜粋)は以下の通りです。

グループ毎の議論の内容の抜粋

【学習環境の構築について】

- 学習環境、あるいは「学習における生態系(“learning ecosystem”)」の観点についてはどうか。オンライン教育・オンライン学習は魅力的な面もあるが、教室環境でしかできないこともあると思われる。
- (上の発言を受けて) オンライン講義を利用した反転授業や協働学習のようなブレンディッドな教育方法は大いに可能性があると思われる。
- 海外の大学とのオンラインでの交流を通じて、学生に国際的な協働学習を提供する教育手法であるCOIL(Collaborative Online International Learning*)のような取り組みもある。

* COILとはニューヨーク州立大学が2006年に開発した、オンラインによる国際的な協働学習をおこなう教育手法・教育プログラムのことである。

【学生間のコミュニティ形成について】

- 学生は互いに仲良くなりながら受講登録をし、授業を受ける。オンラインのみ

の学習では、そういったコミュニティ形成の観点も念頭に置く必要がある。

【アクセシビリティについて】

- コロナウイルスや気候変動が発生した場合などのやむを得ない状況において、VEPのようなオンラインでの教育・学習は解決策となりうると思われるが、アクセシビリティの問題はどう解決するべきか。
- 日本の学生のように、コンピュータは持っていないが、スマートフォンならば持っているという場合はありうる。いわゆるデジタルデバイドの問題は重要な観点だろう。

【持続可能性について】

- オンライン教育の場合、制作のために必要となるリソースをどう確保し続けられるかという観点も含まれてくると感じた。

(3) 事後アンケートの結果と感想

事後アンケートには21名(全体の84.0%)から回答があり、有意義度を5件法で聞いたところ、4.75と高い評価が得られました。また自由記述による感想には以下のようなものがありました。

- 他大学のオンライン教育への取り組みを知る貴重な機会となりました。単位を獲得できるとなれば、学生のモチベーションも変わってくると思います。こういうシステムが一部でも取り入れられる日がくるとよいなと期待しています。

- This was helpful in anticipating what the requirements for online courses will be. I learned about COIL, which I will learn more about. This was very useful.
- 前向きかつ積極的な院生の方が提案し、実行したワークショップ。前向きなエネルギーを頂き、大変刺激になりました。素晴らしい機会をありがとうございました。
- Thank you! It was fun and it is good to think of the future how we can make it better.
- 大学とは何か(どんな機能をもっているのか)を今一度考えさせられた機会でした。

教育制度委員会FD専門委員会（概要）

1. FD研究検討委員会からFD専門委員会へ

本冊子『京都大学のFD』は、全学のFD活動の状況を伝える媒体として、高等教育研究開発推進センターの全面的協力の下、教育制度委員会FD専門委員会によって発行されています。

本学では、2006年度に全学のFD研究検討委員会が設置され、2018年度まで13年間にわたって活動を行ってきました。FD研究検討委員会は、本学教育担当理事と理事補、各部局から選出された教員、高等教育研究開発推進センター所属の教員、及び所轄の事務組織の代表を含む計27名から組織されていました。委員会の活動としては、(a) FD活動の連携・企画(全学教育シンポジウム、勉強会など)、(b) 全学FDの共同実施(新任教員教育セミナー、大学院生のための教育実践講座など)、(c) 部局FDの活動支援(文学研究科ブレFD、工学部教育シンポジウムなど)、(d) FD関連情報の収集・発信・フィードバック(委員会ウェブサイトの運営など)、が行われてきました。

しかし、教育制度改革と連携した、より機動的なFD活動が求められるようになったことなどから、FD研究検討委員会は、2019年に教育制度委員会の中のFD専門委員会へと改組されることになりました。

2. FD専門委員会の組織体制とミッション

FD専門委員会の親委員会である教育制度委員会は、教育担当理事、各研究科・専門職大学院等の教授、国際高等教育院の教授、教育推進・学生支援部長などによって構成され、①学部教育及び大学院教育に係る制度、②学位、③教育の質保証、④FD、⑤その他全学の教育に関する重要なことについて調査・検討する組織です。

FD専門委員会は、このうちFD(文部科学省の定義では「大学の教育の内容及び方法の改善を図るための教員の組織的な研修等」をさす)を中心に所掌しています。具体的には、①全学FDの企画及び実施に関すること、②各部局が実施するFDの総括に関すること、③その他FDに関することを担当しており、教育制度委員会の委員とその他教育担当理事が必要と認める者計8名によって構成されています。

従来、FD研究検討委員会が行ってきたFD活動の多くは、FD専門委員会と、その活動を支援してきた高等教育研究開発推進センター及び教育推進・学生支援部に引き継がれています。2020年度は10月に執行部が交代したため、FD専門委員会の委員も一部変更がありました。

なお、旧・FD研究検討委員会と現在のFD専門委員会の活動内容については、下記のウェブサイトでご覧になれます。

ウェブサイト「京都大学のFD」：<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>





2020 Mutual Faculty Development